
双魚伝承

春木多充

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

双魚伝承

【Nコード】

N6315S

【作者名】

春木多充

【あらすじ】

冥王ハーデスとの戦乱ののち、アテナの慈悲により黄金聖闘士たちは石から復活を遂げる。聖域に彼らとアテナが戻って一年、聖闘士たちは復興作業に勤しんでいた。共に戦地を駆け抜けたアンドロメダの聖闘士・瞬は、復興の中で、かつての宿敵だったピスケスのアフロディーテと、解り合いたくも因縁の障壁を感じ続けていた。復興が終わって日本へ帰る折、アフロディーテが居なくなるという噂を聞いた瞬は、テロ報道が飛び交う中、帰国後ギリシアへ舞い戻ってしまう。

序章（前書き）

瞬が女の子設定です。アフロディーテと恋愛前提です。精神的に大丈夫な方だけです。

序章

- - - - -
- - - - -

女神アフロディーテは怪獣テュフォンに襲われ、

その息子と共に、二匹の魚に姿を変え、エリダヌスの川に逃げ込む。
愛する息子と離れぬように、互いの身を紐で結い、

その姿が天に上げられ、星となった。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

熾烈を極めたハーデスとの戦いが終わり、地上の人々は聖闘士を
讃えながら、そこにどんな物語があったのかさえ知らずに、復興に
勤しんでいた。

ギリシアの十二宮でも復興に追われる毎日が続き、いくばくかの
時が流れた。

アテナの聖闘士の一人、そしてハーデスの依り代となった少女・
瞬も、しばらくは仲間の氷河、紫龍、兄の一輝たちとともに、十二
宮の復興を最後まで手伝った。

アテナの慈悲により、十二宮には、嘆きの壁において命を賭した
十二人の黄金聖闘士が復活し、かつてのようにそれぞれの宮を、そ
してアテナを守る忠誠を誓い、任務に戻るようになった。

教皇の内乱により、かつては敵として戦った存在も居た。だからこそ最初は瞬自身も戸惑いを隠せなかったが、復興の間時を共にする中で、少しずつ彼らも本懐は同じだったのだと、そう感じるようになった。

もちろんそこに至るまでに葛藤が無かったわけではなく、今でも理解できないことはある。

ただ、瞬は少しずつ、黄金聖闘士たちにも心を開き始めていた。たったひとつのわだかまりを残して。

復興の合間を忍んで、逢引をしている聖闘士候補生の二つの影を眺め、デスマスクは作業をふけながら、舌打ちをした。

どいつもこいつもトチ狂いやがって……。

普段とは違って、デスマスクは苛立たしくその二つの影が消えるのを待った。

普通の幼い初恋なら、デスマスクのような男はただ、何も感じず、そんなお年頃だねえと、微笑ましく通り過ぎるだけだった。

だが。

デスマスクは神妙な顔つきで空を見上げた。

晴れ渡る冬の澄んだ空は美しく、雲ひとつ無かった。

デスマスクはこの空の青さにむしろ、嵐の前の静けさを感じていた。

アテナはしばらくギリシアに留まり、アテナ神殿において、女神としての責務に身を捧げるようになった。

氷河や紫龍、一輝はアテナのために日本とギリシアを往復し、しばらくアテナの補佐を引き受けると言い出した。

ハーデスの剣に貫かれ、意識の戻らない星矢への懸念もある。瞬も、始めはそうするつもりだった。

辰巳が手配した飛行機の搭乗チケットが四人に手配されたのは、年の瀬差し迫る十二月の寒い日のことだった。

ギリシアを一度去る。

チケットを渡されたとき、瞬の心の中に、何か言い様のない思いが、こみ上げてくるのを感じた。

復興が一通り済んだ聖域では、今までの労いにと、女神の計らいで、聖闘士たちに新年の休暇が与えられることになっていた。

「新年は帰郷されるんですか？」

磨羯宮でのシユラの言葉に、瞬は聞き返した。

シユラは瞬にも淹れた渋い茶を啜りながら、ああ、と静かに返事をした。

「復興もひと段落したからな。帰郷といっても故郷には何もなし、誰も居ないが——本来永劫蘇ることもない大罪を犯した俺でさえ、女神は慈悲によってこうして地上に戻してくださった。修行地と故郷に一度帰り、墓参りにでも行こうと思う」

シユラの言葉に、瞬は言葉を呑んだ。だが必死な面持ちで顔を上げ、シユラに言う。

「シユラ。もう自分を責めないで下さい。

あなた一人が欠けても、嘆きの門は突破できませんでした。

あなたの思いこそが、アテナの聖闘士である証です。世界は変わっただんです。

あなたがいなければ、こんな未来は訪れなかったんです」

真顔で必死に訴える瞬を、シユラはしばし正面から見据えた。そして、ふと憂いを秘めた目で笑った。

シユラは何も言わなかった。

この人はこれからも、アテナの聖闘士として、これまでそうだったように、忠誠を尽くして生きていくのだろう。

その変わらない生き方の中で、それでも自分で犯した罪を、背負い続けていくのだろう。

その荷は誰にも背負うことはできない。

シユラ自身にしか。

「お帰りはいつになるんですか？」

おずおずと瞬が問う。

「そうだな。色々しておきたいこともあるから。ひと月はかかると思う」

しておきたいこともあるから。

瞬にはだいたいシユラが、不在の間何を遂げようとするのか予想がついていた。

やっと貰えた休暇を、すべて罪滅ぼしの時間に費やすつもりなのだろう。

「そうですか。また来ますから、その時はまた、このお茶ご馳走して下さいね」

シユラをつなぎとめるように、瞬は渋い茶に目を落としながら、愛おしそうにカップを撫でた。

この人はこんな風にしか生きられない人なのだ。

こんな実直な人に、せめてあんな運命の間違いが起ころなければ良かったのに。

「そういえば、この新年はほとんどの聖闘士が俺と同じで帰郷するらしいぞ。アテナの護衛のために何人かは残るが、俺たちが帰ってきたら、彼らも後発として一度帰郷するだろう。」

そのまま帰ってこない者もいると聞いた。お前も日本に帰るのだろう。しばらくは聖域が静かになるな」

「え…」

瞬ははつと顔を上げた。

「帰ってこない？誰がですか？」

「さあ。そんな話を仲間づてに聞いたただだ。誰かは知らん」

瞬は胸騒ぎを覚えた。

「さて、お前も帰国の支度があるのだろう。それを飲んだら行くがいい。年明けにまた会おう」

いつも厳しい表情のシユラが、優しい目で瞬を促した。

それでも、瞬の胸のうちは、さざめき立って鼓動が早くなるのを感じた。

日が落ちてムウは、守衛が施錠したのを見届け、その鍵を受け取った。

「確かに受け取りました。この寮の一時閉鎖完了を、アテナに報告します」

頭を下げる守衛を背に、ムウは聖域への道に戻っていった。

ムウが去ってから守衛二人は、もう一度寮の周りを確認し、誰も居ないことを確かめると、仕事を終えて戻っていった。

瞬の荷造りは、はかどらなかつた。

磨羯宮を出てから、白羊宮に下るまで、瞬はそれとなく、会った黄金聖闘士に尋ねて回った。

天蠍宮にはミロとカミュが居て、やはり新年の帰郷の話をしていった。

ミロは修行地がギリシアなので、ミロス島に一度赴きはするが、カミュは年明け早々にロシアと東シベリアへ発つ予定だという。

シヤカは処女宮に残り瞑想を続けるらしい。アイオリア、カノンも修行地・出身がこの地のため、十二宮に残る予定だそうだ。

デスマスクだけはさっさと休暇をもらい、シチリア島で羽根を伸ばしていて不在だった。

ムウは今日も聖衣の修復に遅くまで精を出していたが、一応の区切りがついたらジャミールへ一度帰ると言う。

白羊宮を出て、十二宮が背後に遠ざかる頃、瞬はため息をひとつ吐いた。

——一番肝心なことが、聞けなかった。
それが荷造りの手が重い原因でもあった。
瞬がここでやり残していること。

あの人と、きちんと一度話したいのに。

聖域の復興において、瞬は黄金聖闘士とそれなりに打ち解けてきた。

が、ただ一人、心のわだかまりが邪魔をして、ほとんど話すことのできないでいる存在がいた。

ピスケスのアフロディーテ。

二度も戦った因縁の人。

父とも慕った師・ダイダロスを討った聖闘士——

あの人は……聖域を出てしまうのだろうか？

- - - - -

どうしても。どうしても。

思いが胸をよぎるたび、父と慕った師の顔が去来する。

そんな葛藤を抱えて、いつたいどれほどの時がここで流れたのだろう。

復興作業は三月ほどだったはずなのに、瞬の体には、それ以上の時間が流れた気がしていた。

「おい。もう出る準備をしろ」

不意に顔を上げると、開け放たれたドアから、氷河が座り込む瞬を見下ろしていた。

「あ…うん」

ギリシアを発つ。

十二宮に残っていた黄金聖闘士たちは、瞬たちにしばしの別れを告げて、手を振って宮に戻っていった。

あとは城戸邸の専用ジェットに乗り込むだけだった。

一息入れたら出発する、と氷河は言い残し、瞬も来るようにと促して部屋を出て行った。

瞬は生返事をしたものの、相変わらずうつむいたまま、とある人のことを考えていた。

アフロディーテだけ見送りに来てくれなかった。

それは彼が、瞬たち青銅聖闘士に対して、快く思っていないからなのだろうか？

瞬は嘆きの壁でのことを思い出す。

瞬。あのときの奇跡を…

アフロディーテはそう言った。

初めて名前で呼んでくれた、最初で最後の瞬に向けられたアフロディーテの言葉。

瞬は、アフロディーテと話したかった。

彼なりの正義で、アフロディーテは聖域を守った。

それゆえに、瞬自身と対峙することになって。

瞬はアフロディーテのことを何も知らなかった。

だから、知りたかった。

彼が、どんな人なのか。

始めは何を話したらいいのか解らなかったシュラの元に瞬がよく訪れるようになったのは、シュラが意外に面倒見がいいことと、瞬があまり使わない体術を基礎から教えてくれるからだった。

復興の合間にシュラはよく、瞬の鍛錬に付き合ってくれた。

それゆえ瞬が磨羯宮まで上ることはよくあったが、本当に行きたい双魚宮までは、どうしても足が赴かなかった。

拒絶されているのでは、という不安があったからかもしれない。

このまま……何も話せないまま、私は帰国してしまうんだろうか。

瞬がまつげを伏せたその時だった。

「おい瞬！もう行くぞ」

兄の一輝がドアを乱暴に開けて怒鳴った。

「ぐずぐずするな。あとは身一つで乗り込むだけだろう」

一輝は瞬の腕を引いて、城戸邸の自家用ジェットの前まで引っ張っていった。

すでに氷河と紫龍は乗り込んでいた。

一輝もすぐに乗り込む。

瞬はためらいながらも、ステップに足をかけた。
そのとき。

「アンドロメダ」

背後で声がした。それは、待ち焦がれていた人の声だった。

瞬ははっとして振り向く。そこには、ピンクのバラの花束を抱えたアフロディーテその人が立っていた。

「すまなかったな。仕事が長引いてしまって。だが間に合ってよかった」

アフロディーテはバラの花束を瞬に渡した。

「アフロディーテ……」

「日本へ帰るのだろう。君とはなかなか話す機会がなかったが、最後くらいは挨拶しておかねばと思ってな」

渡されたバラの花束からは、なんともいえない慎ましい清楚な香りがした。

「安心しろ。毒のない薔薇だ。餞別だ、持って行きたまえ」

そしてアフロディーテはくるりと踵を返した。

「あ……！」

待って、と言いかけた瞬を、無理やり氷河と一輝がジェット機に乗せる。

瞬たちがジェット機に乗り込むと、アフロディーテは一度だけ振

り返り、飛び立つ機体に手を振った。

そして、ジェット機が発進するとともに、アフロディーテはさつさと十二宮の方角へと歩いて行ってしまったのだった。

「……！」

ジェット機の窓から、瞬はどんどん小さくなっていくアフロディーテの背中をずっと追った。

『最後くらいは』

『最後くらいは』

『最後くらいは』

その言葉が、瞬の胸に突き刺さってかき乱した。

帰郷したまま帰ってこない聖闘士——それが、アフロディーテだとしたら。

これが最後の別れになる？

日本へ旅立つジェット機の中で、瞬は、言いようのない感情に支配されるのだった。

腕の中で静かな香りをかき立てるピンクの薔薇が、いつまでも瞬の鼻腔をくすぐるばかりであった。

第一部

日本に帰国し、数日が過ぎた。

世界は新年を迎え、あちこちで、一年に一度の新たな日々が街を彩っていた。

瞬たちにとっては正月など今まで無縁だったが、今年は城戸邸で正月らしい料理やもてなしが振舞われた。

それでも瞬は浮かない顔で、花瓶に生けた、あの日アフロディーテからもらった薔薇の花束を、ただ眺めては嘆息する新年を送っていた。

小正月を過ぎ、その薔薇が一輪、翳りを見せ始めた頃、テレビから流れるニュースを耳にして、瞬ははっと顔を上げる。

『ギリシア国内で同時多発的に起こっているテロの続報です。』

ギリシア政府はテロの件を憂慮し、アテネ国際空港の便を今日より、制限すると発表しました』

ニュースを目にして、瞬はその場に立ち尽くす。

「一昨日から続いているな」

テロの報道を聞きながら、氷河が瞬に背を向けたまま言った。

「俺たちが向かう場合、制限はどうなるんだろうな。聖闘士の入国もできない、なんて混乱にはならなければいいが」

あの人がいなくなるかもしれない。

ふと思ったのと同時に、瞬は胸をかき乱す感情にとらわれ始めた。日に日に薔薇はしおれ、やがて最後の一輪を残して枯れ始めた。

ギリシアのテロの続報は、日々続いていた。

ギリシアへ向かう航空便の数は日に日に減らされていき、このまま手を拱いていたら、チケットも取れなくなるのではないか、という不安が、胸をよぎった。

今しかない。

瞬は、勢いで手荷物を掴むと、そこに必要な最小限のものだけ詰め込んで、ギリシアへ発つことに決めた。

時間がない。間に合わないかもしれない。

それでも。

話さなければならぬことがある。聞かなければいけないことがある。

ギリシアに忘れ物をした、テロの件が心配だからアテナの顔を見に来る、とだけ告げて、瞬は城戸邸を飛び出したのだった。

ギリシアへは城戸邸の自家用ジェットでしか来たことがなかったから、自分で飛行機の手ケットを取るのは初めてのことだった。

何とかしてチケットを取ったが、空港で何時間も待たされた。

やっと乗った機内の中で過ごす間にも、ギリシアへ着くまでには乗換えを含めて十時間も要したし、乗り継ぎの空港ではまたテロによる懸念の運行休止の足止めを食らって、次の日にさえなってしまう。瞬の焦燥は静まる気配がなかった。

具合が悪くなりそうだ。瞬は思った。

思い出すのはあの人の戦士としての厳しい顔。

幾重にも幾重にも、二度の戦いの中で見せた彼の厳しい顔と傲然たる微笑が、瞼の裏で重なり合った。

でも、最後に。

『餞別だ。持って行きたまえ』

初めて穏やかに笑ったあの表情が、瞬を包み込んだ。

はっとして目を覚ます。

少しばかり眠っていたようで、また瞬は機内の中で焦燥感に襲われながら、同じ眠りに落ちるのだった。

ギリシアに到着するも、聖域につくまでには時間を要した。

テロが続いているという報道がされていただけあって、街には厳重な警備網が敷かれていた。

それを掻い潜り、慣れない路線やバスを乗り継ぎ、ひたすら歩いて聖域に着く頃には、空港の足止めのせいで二日後、現地時間で二十三時を回っていた。

しんとした聖域。こんな聖域を見たことがあっただろうか。

瞬は、小さな手荷物を背負い直し、白羊宮へ至る道に踏み込んだ。

十二宮はどこも静まり返っていて、無人だった。

十二宮の黄金聖闘士たちは立派な宮を守護しながら、自分たちが聖域に待機しなければならないときは、それぞれが質素な生活空間を、宮から少し離れたところに持っていた。

誰かは夜の見張りとして残っているはずだが、この時間では休暇を貰って不在にしている聖闘士を除いて、それぞれの生活空間に戻り、すでに皆休んでいるのかも知れない。

処女宮で初めて黄金聖闘士、シャカに出会った。

「アンドロメダか。日本へ帰ったのではなかったのか」

双眸を閉じたまま、シャカは微動だにせず瞬に問いかけた。

「瞑想のお邪魔をして申し訳ありません。忘れ物をしたんです。通らせていただけますか？」

シャカは何も聞かずとも、一瞬得心したように見えた。

「アテナへの届け物もあるようだな。通るが良い」

「はい。ありがとうございます」

失礼します、と言って、瞬はシャカに一礼して、処女宮を通り過ぎた。

無人の人馬宮を通り抜けるとき、瞬はアイオロスの残した壁の遺言の前で少し立ち止まったが、すうと息を吸って、双魚宮を目指して階段を上り始めた。

鼓動が高鳴る。

双魚宮への石段を一段、また一段と上るたび、心臓は早鐘を打った。

夜闇に包まれて辺りは暗かった。

が、その暗さは夜のせいだけではない気がした。
人の気配がしない。

やがて見えてきた双魚宮からも、灯りがついている様子がなかった。

瞬はざわめきたつ失望を感じ始めていた。

やっと双魚宮の前に立ち、瞬は宮を見上げる。

「……」

瞬は、意を決して宮に足を踏み入れた。

カッン、カッンと、瞬の足音が宮に響き渡る。

「アフロディーテ……」

瞬は彼の名前を呼んだ。

返事はなかった。

双魚宮は無人で、ただ吸い込まれそうな闇が前方に広がっているだけだった。

「アフロディーテ」

瞬はもう一度呼んだ。

冬の寒々とした冷気が床を吹き抜けていく。

誰も居ない。

「アフロディーテ！」

なかば懇願するように瞬は叫んだ。それでも、瞬の声は宮の奥の闇へと飲まれていっただけだった。

宮を出て瞬は、行ったこともない双魚宮の聖闘士の生活空間を探した。

だが、どこにもそれはない。

一月の夜の風は冷たく頬に突き刺さり、コートを着込んで居ても、粗末な服の中に風がいくらでも入り込んできて、寒い。

瞬はその場に崩れ落ちた。

訊きたいことが あったのに。

話したいことが あったのに。

知りたいことが——あったのに……。

帰ってしまったんだ。あの人はもう、ここには居ない。

ぼたり、と冷たい床に雫が落ちた。

我知れず瞬は泣いていた。

寒さで心細くなった。そのせいで涙が出たのかも知れない。

とりあえず、これからどうしよう……。

瞬は涙をぬぐうこともせず、しばらく地べたに座り込んでいた。

「アンドロメダ？」

ふと背後で声がした。夜風が運んできた幻聴かとも思った。

瞬はゆっくり振り返った。

そこには、月明かりを背に薪を両手に抱え込んだ、コート姿のアフロディーテの姿があった。

「やはりお前か。日本へ帰ったのではなかったのか」

アフロディーテは瞬に近づいてくる。

瞬はいまだ、それが幻ではないかと錯覚していた。

「どう……して……」

「それはこっちの科白だ。こんな夜更けに、こんな所で何をしている」

瞬のそばに来てしゃがみこんだアフロディーテは、瞬の頬に幾筋の涙の跡があるのに気づき、はっとした。

「どうかしたのか。何かあったのか」

言われて瞬は、慌てて頬を拭った。

「わ、……忘れ物を……」

言葉が紡げずに、咄嗟に瞬が言ったのはそれだった。

「……………」

忘れ物、と言われてアフロディーテは不思議そうな顔をした。復興時、ほとんどいいほど接触してこなかった瞬は、必要最低限しか、双魚宮を訪れたことはなかった。それこそ宮を通らせてもらう時に、その許可を与えた程度だ。

「それはここにあるのか？」

「……………はい」

アフロディーテはしばし瞬を見つめていた。

だがやがて、寒い宮の中で涙に濡れた頬で座り込む瞬の姿を不憫に思い、立つように促すと言った。

「ついて来い。来たまえ」

アフロディーテは脇道に逸れ、暗い林の中に入ってしまった。瞬は頬を拭い、その後を追う。

暗い林の中を進むと、小さな生活空間が、少し歩いたところに見えてきた。

粗末な建物の中に入り、躊躇っている瞬にも入るように促すと、アフロディーテは灯りをつけ、薪を暖炉のそばに置いて、火を起こし始めた。

「こっちへ来い。冷えただろう」

アフロディーテは瞬の方を向いた。瞬は、しばらく戸惑った。が、言われたとおりに暖炉のそばに近づいた。

アフロディーテは瞬が暖を取り始めたのを見ると、湯を沸かし始めた。沸くまでの間に毛布を一枚取り出してきて、それを座り込む瞬の肩に掛けた。

瞬は驚いてアフロディーテを見る。アフロディーテは不思議そうな顔をした。

「何だ。意外そうな顔をして」

「え……いえ、…ありがとうございます」

瞬は毛布の端を、肩のところでぎゅっと握り締めた。

その様子を見ながら、アフロディーテは沸かした湯で茶を二人分淹れた。

カップに注がれた琥珀色の紅茶が、白い湯気を立てて瞬の顔の前に差し出された。

「寒かっただろう」

瞬にカップを渡すと、アフロディーテは隣に座って、一口自分の紅茶を口にした。

瞬はなかなかカップに口をつけなかった。温かなカップを両手で包み込み、じっと紅茶の揺らぎに目を落としている。

「毒なんか入っていないぞ」

「そんなこと……！わかってます……」

慌てて瞬は言った。この人にはそう思われているのだろうか。何を以ってしても、自分は警戒しているのだと……。

瞬はゆっくりと、紅茶に口をつけた。温かい、体の芯まで温めてくれるようなぬくもりが、体の中心を流れていく。

「おいしい」

瞬の口元が、初めてほころんだ。それを見て、アフロディーテはやれやれとため息をついた。

「それで。こんな夜更けに何を忘れて戻ってきた？大切なものなのだろう」

泣くほどに。大切な。

「あ……」

空になったカップをまだ両手で握り締めたまま、瞬は暖炉の炎に視線を逸らした。

「…アフロディーテが、故郷に帰ってしまうと聞きました」

答えになっっていないような瞬の答えに、アフロディーテは不思議そうな顔をした。

「私はもう帰ったぞ？」

「はい？」

「一番最初に休みをもらったから、一応帰るには帰ったが、故郷には何もない。適当に土産物だけ買って、早々に帰ってきた」

「え、でも！シユラが、帰郷したまま帰ってこない聖闘士が居るって……だから……私……その前に！」

それを聞くと、アフロディーテは呆れたように嘆息した。

「またデスマスクの虚言をあいつが真に受けたのだろう。それが、聖闘士を志すのを辞めて、国へ戻った候補生の話でも人づてに聞き、お前に言葉足らずのまま話したか。」

あいつはいつまで経っても口下手だから困る」

「え……じゃ、じゃあ……」

「アテナの聖闘士が私情で宮を去るわけがあるか。そのくらい君でもわかるだろう」

「……そんな。だって……『最後くらいは』って、あなたも言ったじゃないですか」

アフロディーテは不思議そうな顔をする。

「私たちが帰国する時……ピンクの薔薇の花束をくれたじゃないですか。」

そのとき……」

「ああ」

思い出したようにアフロディーテは言った。

「君が帰ってしまったら、もう君とは完全に疎遠になるのだろうと思っただけだな。」

復興時もあり話しかけてこなかったし、だが青銅の中では一番ゆかりのあった相手だ。

最後くらいは挨拶しておこうと思ってな。きちんと顔を見て「……」

アフロディーテの言葉に、瞬は一気に肩から脱力していくのを感じた。

アフロディーテは瞬から空のカップを受け取り、自分のそれと片付け始めた。

「もう遅い。失せ物探しなら明日手伝ってやる。今日はどうするんだ」

「え……あ、はい、えっと……」

瞬は立ち上がった。何も決めては来なかったが、これからまた石段を降りて、誰か女子候補生の部屋に潜り込もうかと思っていた。

「明日許可が下りたら、アテナへの謁見を仰ぎたいですし……今日は、候補生の誰かに寢床を借りようかと思っています」

「女子の寮なら今は使えないぞ」

背を向けたままのアフロディーテの言葉に、瞬はきょとんとした顔をした。

「え？」

「最近候補生の風紀が乱れていてな。教皇もアテナも頭を悩ませている。寮はこの新年から閉鎖されて、女子はサントリー二島に期限をつけて移ったところだ」

「そ、そんな……そんな話聞いていません」

「君が聞いていなくてもそうなのだ。ムウが寮の閉鎖をしたのを、知らなかったのか」

「でも……寮自体があるなら、私、そこで」

「だから。そんなところに女一人で行って、どうなるかは大体想像がつくだろう。アテナも許すはずがない。まして懇意にしている君などを」

「……………」

どうしよう、と瞬はうつむいた。本当に何も考えてこなかった。たったひとつのことだけを思っ

「今日はここに泊まれ。カミュも何度も通られては、眠るに眠れない。

こんな時間ではまともな宿も取れないだろう。

テロの件もあるし、これから街に出るのは危険だ」

「……え？」

瞬はびっくりと硬直した。今、アフロディーテは何と言った？

「ベッドはこっちだ。私はここで着替えるから、君は中で着替えるといい」

「あ、あのっ…な、…何言ってるんですか!？」

アフロディーテは構わず上着を脱ぎ始めた。瞬は耳まで赤くなり、毛布を頭から被って両手で目隠しをした。

「ぐずぐずするな。私はもう眠いんだ」

瞬から毛布を引き剥がすと、アフロディーテは必死に訴える瞬を、手荷物と共に寝室に押し込んだ。

押し込んだ扉の向こうで、瞬が必死に何かを訴えている。

アフロディーテは扉越しに、うるさそうに瞬に言った。

「私はソファで寝る。君はここで休むがいい。それじゃまた明日」
寝室の中からは、それきり何も聞こえなくなった。

あとに残された瞬は、どうしていいかわからずに、しばらく動悸を感じながら、動けずにいた。

こんなことになるなんて。

思いもしなかった事態に、瞬は頭が追いついていくことができなかった。

ぐるぐると思考は巡り続け、今しがた起きたことがフィルム写真のように、何度も何度も目の前を入れ替わり、立ち代わる。

到着がこんなに遅くなるとは思わなかったが、まさかアフロディーテの元に泊まることになるなど、考えもしなかった。

たしかにこの時間、慣れないギリシアの街にもう一度戻って、今

から手持ちの金で泊まれるような宿を探すのは、自分の力では無理だった。それでも、そうするつもりでいた。

瞬は何時間もその場に立ち尽くした。

やがてしんと何もかもが静まり返り、何も聞こえないほど夜が深まった頃、瞬はそつと押し込まれた寢室の戸を開けて、外を伺った。ソファでアフロディーテが、こちらに背を向けて眠っている。その姿を遠目に見て、瞬はそつと、扉を閉じた。

「……………」

月は、もう窓から見えなくなるほどに傾いてしまっていた。瞬も旅の疲れから眠気を感じたが、それでも眠ることはできなかった。

明け方ごろ、疲れから体が観念して、瞬はやつと睡魔に負けて眠りに落ちた。

布団から落ちそうになるほど、ベッドの端に身を寄せて。

第二部

翌朝、瞬は早くに目覚めた。

明け方ごろうつらうつらと眠った気がするが、ほとんどまどろみのような眠りで、眠った気がしない。

見知らぬ天井を見上げて覚醒したとき、瞬は慌てて起き上がり、はあと一つため息をついた。

無理もない。

瞬はのろのろとベッドのシーツをきちんと直し、おそろおそろ寝室を出てみた。

アフロディーテの姿はない。

ふと外で、物音がするのが聞こえた。

音のする方に行ってみると、閉ざされた扉の向こうで、アフロディーテが庭の手入れでもしているらしかった。

薔薇の手入れ？

朝はまだ早かった。瞬はそつと、扉を開けようと手をかける。

「アンドロメダか」

閉ざされた扉の向こうで、アフロディーテの声がした。

瞬はとりあえず朝の挨拶をしようと、扉を開けようとした。

だが、開かない。向こう側から、鍵がかかっているらしかった。

「ここは私以外立ち入り禁止だ。顔でも洗って来い。私も今戻る」

「あ…はい」

瞬は思い出しながら扉から後ずさった。扉の向こうでは、薔薇の香気が立ち込めているのだろう。それを悟った。

しばし瞬は、アフロディーテと自分を隔てる重いこの扉の前に立ち尽くした。

こんな扉一枚隔てて、世界はまるで違う。あなたの居る世界と、私の居る世界。

瞬は洗面所へ行き、何度も何度も顔を洗った。冷たい水が頬を突き刺すかのようだった。だが正気を取り戻すにはいい。勢いでここへ来たものの、まさかこんな形で一夜を明かすとは思わなかった。やがて気の済むまで洗顔をすると、瞬は一番小さなタオルを見つけて、丹念に顔を拭いた。

鏡に自分の顔が映っていた。なんとも情けない顔だった。

物音がした。アフロディーテが戻ってきたのだろう。それでも瞬は、しばらく洗面所から出ることができなかった。

ようやくおずおずと洗面所から顔を出して外を伺うと、アフロディーテは朝食の支度を済ませ、配膳をしているところだった。

「おはよう」

アフロディーテは洗面所から顔を出した瞬に言った。

「あ……お、おはようございます」

瞬はやつと洗面所から観念したように出た。

「座れ。朝食にする」

アフロディーテは自分の椅子に座り、向かいの席を瞬に勧めた。

「あ……すみません。朝ごはんまで……私、そんなつもりじゃ」

「いい。理由はどうかあれ、君は私の客人のようだ。客人を持て成す礼儀くらいは私にだってある」

「……ありがとうございます」

瞬はぺこりと頭を下げて、控えめに椅子に座った。

この人と向かいの席。アフロディーテと向かい合って座る日が来るなんて、あの頃は予想だにしなかった。

朝食は淡々と過ぎていった。何を言ったらいいのか解らずに、瞬は気まずい沈黙の中で、あまり食べずにアフロディーテの様子を伺っていた——あくまで、視線は食事に落としたまま。

アフロディーテの方は何を気にするわけでもなく、瞬が目の前にいないかのように食を進めていた。

「昨日は眠れたか」

気を遣った様子はまったくなかったが、不意にアフロディーテが

沈黙を破った。

「いえ……ほとんど……」

「人がベッドを貸してやったのに。あれは寝心地だけはいいいんだぞ」

「す……すみません」

瞬は赤くなつてうつむいた。

「で。何のためにここへ来た。昨日の話でだいたい予想はついているが」

「あ……」

見透かされていたのだろうか。ここへ来た理由を。

アフロディーテは瞬を見据え、瞬の返事を待った。こんな風に正面から目を合わせるのは、対峙したとき以来だ。

瞬は吸い込まれそうな相手の青い双眸に、どう返事すべきか困惑した。

それでもアフロディーテはまっすぐ瞬を見据えている。

観念して、瞬は正直に言おうと思った。

「私……あなたに訊きたいことがあつて。それから……あなたのこと何も知らないから、その……どんな人なのか、知りたくて……」

「……………」

「あなたが聖域から居なくなっちゃうんじゃないか、って思ってたから、その前に……お話したかったんです。

復興時、ほとんど話せなかったから……」

……最初は敵同士として出会ったけれど、これまでのことを通して、あなたも志は同じ、アテナの聖闘士であることを知りました。だから……どうしてこんなことになってしまったのかと……本当は、解り合える道はなかったのかと……ずっと……考えていて」

瞬は下を向いたまま、懸命に説明した。だがアフロディーテが無言なので、ためらいながらも顔を上げ、相手の表情を伺ってみる。頬杖をついたまま、アフロディーテは表情も変えずやはり瞬を見下ろしていた。

瞬が目を合わせると、アフロディーテはふう、とため息をついた。

「忘れ物、とやらはそれか」

「あ……はい」

言われて瞬は恥ずかしくなった。だがアフロディーテが言ったのは、予想だにしかかった言葉だった。

「君がここへ何をしに来たのかはだいたい解った。それで君はこれからどうする」

「え？えつと、あの……」

答えを求められて、瞬は戸惑った。

「アテナの無事な顔を見て……テロの件も心配だから、許可がもらえたら、しばらく聖域に留まって、警備のお手伝いとかできたらと思います。」

その中で……あなたと、お話ができたらと。

色々……今まで話せなかったこと、聞けなかったこととか。

……ここに居る間は女子寮に寝泊りしようと思っていたから、閉鎖されてるなんて、思ってもみなかったんですが」

瞬は必死に言葉を紡ぐ。アフロディーテは瞬の言葉を一字一句聞いている。

「君、私を手伝う気はあるか」

「え？」

不意に言われた言葉に、瞬は思わず顔を上げる。

「ここにしばらく居るつもりなら、私の仕事を手伝って欲しい。警備の他にも、することはいくらかでもある」

「仕事って……どんなことですか」

「孤児院の子供たちの面倒。薬の調合。負傷兵の介護。そんなところだ」

瞬は驚いたように目を見開く。そんな提案がアフロディーテの方から出てくるなんて、思ってもみなかった。

アフロディーテは答えを求めた。

「するのか。しないのか」

「あ……します、させて下さい。アテナの許可が降りたら……」

「じゃあ謁見を仰ぎに行こう」

アフロディーテは食器を片付けに立ち上がり、さつさと準備を始めた。

「よもや君の方から私を訪ねてくるとは思わなかったがな、アンドロメダ。人手が欲しかったところだし丁度良い。色々させるから、話したいことがあるならその中で話そう。」

私も君と話す機会が欲しかったが、今まで君の方から私の元に来てくれなかったしな。いい機会だ」

「え……」

話す機会が欲しかった。私と？

「今まで私を避けていた君が来たことには驚いているが。復興時から、常々君には手伝ってもらいたかったことがたくさんあった」

「わ、私……あなたを避けてなんかいません、あなたに拒絶されているんじゃないって……」

「私は君を拒絶した覚えはないぞ」

「……」

瞬は言葉を飲み込んだ。そう、別にお互い拒絶し合っていたわけではない。

ただ、これまでの強い因果が、因縁が、二人の間に大きく横たわり、幼い瞬の方からは、その隔たりを越えていくことができなかったただけだ。

しかし瞬は飛び越えてギリシアに戻って来てしまった。復興時ずっと聖域にできなかったことを、帰国を経たあとに成し遂げてしまった。

「行くぞ」

アフロディーテは小さな流しに皿を片付けると、瞬を促した。

「……はい」

瞬は先に生活区を出たアフロディーテの背中を追いかけて、双魚宮を抜けて石段を上った。

第三部

アテナは突然の、瞬の訪問を喜んだ。

一応届け物も持ってきていた。沙織が城戸邸で着ていたドレスを複数着従者に渡し、瞬は、テロのニュースを聞いて、心配だったから来てしまった、と告げた。

「ニュースではテロと報じられていますが、もしかして聖闘士の内乱の可能性もあると思って。もし許可をいただけるなら、しばらく聖域に身を置いて、何かお仕事のお手伝いができればと」

「ありがとう。あなたたちを呼ぶときは、こちらから呼んだのに。でも来てくれて嬉しいわ、瞬。あなたが居てくれるなら、心強いもの」

沙織は本当に嬉しそうに微笑んだ。

「テロの件ですが、この兆候は半年前からありました。ただまだ表面化していないので、黄金聖闘士の数人に、偵察を任せているのみの段階です。」

これ以上のことはまだ公言することはできませんが、瞬。せっかく来たのだから数日居なさい。聖域に居て、私のそばに居て頂戴」
「はい。もちろんです」

瞬は優しい沙織の微笑みに、心が温かくなる思いで返事した。

隣で傳っていたアフロディーテが、アテナに対して口を開く。

「アテナ。瞬がギリシアに滞在する間、彼女の保護を私が請け負っても構わないでしょうか。」

お許しただけるなら、彼女に私の仕事を手伝ってもらいたいと思います。孤児院の子供たちが増えて、人手が足りなくて困っていたところで」

その言葉を聞いて、アテナは安心したように微笑む。

「そういうことなら、本格的に教育するのもいい機会かもしれません」

ん。瞬の力は子供たちの役に大いに立つことでしょう。警備の仕事をさせるより私は賛成ですよ。瞬、あなたはそれで構わないかしら？」

「あ……はい」

瞬は頷いた。沙織は、打ち明けるように言った。

「瞬。あなたは知らないでしょうが、アフロディーテは以前から、あなたの才覚を買っていたのですよ。私も復興時より、あなたが望めば、彼の仕事の補佐を頼みたいと常々思っていました」

「え……」

言われて瞬は目を丸くした。アテナはただ、アフロディーテに瞬を頼みますよ、と念を押した。

「ただ、瞬。今は、女子寮が期限付きで一時的に閉鎖されています。三日ほど時間をもらえるなら、すぐにあなたの生活する場所を用意させますが。その間はどうしますか」

「え……と……」

瞬は口ごもった。そして何とか、言葉を紡ぐ。

「どこか、安いホテルを探して泊まります。ご迷惑おかけしてごめんなさい、私、寮が閉鎖されていたなんて知らなくて……何とかします」

それを聞いてアテナは、安心したように微笑んだ。

「あとで滞在費用を出しますから受け取りなさい。すぐに良い部屋を用意しますからね。三日だけ、我慢して頂戴」

そう言つて沙織は、侍従に申し付けて立ち上がった。

そしてそつと、瞬の前に屈んで、瞬の首に手を回して囁く。

「本当によく来てくれたわ、瞬。正直、あなたたちが帰ってしまつて、心細かったの」

アテナはこの瞬間だけ、城戸沙織に戻った。

「アテナ……アテナのためなら、いくらでも私、力を惜しみませんから」

瞬の言葉を聞いて、沙織は笑った。そして、祈りのために間を退

室した。

侍従はアテナが退室したのを見届けると、謁見の間を出た瞬に、アテナから言われた通りの滞在費をあとで出すと、瞬に告げた。

アテナに礼をして双魚宮へ戻るとき、瞬は慌てて先を行くアフロディーテの背中に問いかけた。

「あの……お仕事はまず、何をしたらいいですか」

「今日のところは孤児院へ赴く」

「孤児院……ですか」

瞬は歩みを止めた。アフロディーテが振り返ると、瞬はさも意外そうな顔で立ち尽くしていた。

「何だ。私がそういう仕事をしているのが意外そうな顔だな」

「……はい。ご飯の時間聞いて、ちょっと……びっくりしています」

正直に答えた瞬に対し、アフロディーテは初めて鼻で笑った。

「君には相当嫌われているらしいな、私は」

「そ、そんなことはありません」

「無理もない。ずいぶん汚れた仕事もしてきたからな。だがこれでも、私は子供の相手は得意だぞ」

それは想像もつかないことだった。瞬は戦いの中でのアフロディーテしか知らない。子供たちとじゃれ合う彼など、想像もできなかった。

「国の支援が回らない孤児院が、この辺りにはいくつもあってな。無論、十分な薬も施されない。そういった子供たちの面倒を見ている。自分が薬学に携わっていて良かったと思う」

「……そのお手伝いを、私に？」

「そうだ。嫌か？」

「いいえ。私も子供は大好きです」

「そうだと思っていた」

アフロディーテは笑った。今まで見たことのない表情だった。

この人は、私をそんな風に見ていてくれたのだろうか。前から才覚を買っていた？

「アフロディーテは……私のことなんか、無関心なんじゃなかったんですか」

再び歩き出したアフロディーテの背に、瞬は思ったままを問いかける。

「君は意外に思い込みが激しいんだな」

振り向かずにアフロディーテは言った。

「二度も拳を交えた相手だ。君がどんな小宇宙の使い手で、君が本来争いを好まぬ戦士だということも知っているつもりだ」

どきり、と瞬の心臓が高鳴った。

「私と君は性格は随分違うようだが、基本的なところは似ていると思っている」

「……え？」

「そのうち解るだろう。手伝うつもりがあるなら来い。こっちだ」
アフロディーテは石段を外れ、林の中に入って行った。瞬もその後を追う。

冬ではあったが、聖域の緑は遅しく息づいていた。アフロディーテは雑草の中から、これを、と言って一種瞬に薬草を採って示した。「こんな季節だから流感が流行っている。この草は煎じればその薬になる」

瞬は渡された薬草をしげしげと見詰めた。

「孤児院でも今七人が罹患している。三十ほど摘んでくれ」

「は、はい」

言われたままに瞬は、渡されたのと同じ種の草を探した。最初は見分けがつかなかった。それでも、葉の特徴をアフロディーテが示すと、だんだん見分けがつくようになった。

「意外に飲み込みが早いな」

アフロディーテはくすりと笑った。

「この草は割りと見分けが難しい種なんだ。君にはやはり、戦いよりもこういうた作業の方が向いているのかもしれないな」

アフロディーテの言葉に、瞬は思わず彼の顔を見上げた。
優しい目をしていた。

この人はこんな表情もするのか。戦いの中では――厳しいまでに冷たい眼光しか、見たことはなかったというのに。

「採り過ぎだ。そんなに採ったら三十人分は作れるぞ」

「あ……」

正しい薬草を見つけるのに夢中になっていて、気がつけば瞬の両手には、抱えきれないほどの薬草があった。

「これでは煎じるのも大変だな。まあ、食材にもなるから、余った分は子供たちの食事に使おう」

「す、すみません」

アフロディーテは薬草の束を片手で持って歩き出した。両手いっぱい薬草を抱えながら、瞬はまたその後を追う。

ここへ来てから。この人の背中を追いかけてばかりだ。

追いつきそうで追いつけない。理解したくてここへ来た。いつか、それが叶う日が来るのだろうか。

――いつか？

瞬ははっとした。私はいつまでここに居ることになるのだろうか。

長くあつてほしいとも感じた。が、同時に、いたたまれない気持ちになるのも正直な思いだった。

恩師ダイダロスの記憶が蘇る。

だがそれだけではないことを、まだ幼い瞬には理解することができなかった。

摘んできた薬草を煎じるのは、一苦労だった。

うまくいかなくて、何度もアフロディーテに注意された。

ふと背中から両手を掴まれる。

「こうするんだ」

アフロディーテは瞬に手を重ね、搗粉木を慣れた手つきで搗り鉢の中で回した。

どきり、と瞬は心臓が跳ねるのを感じる。

「まあ始めはそんなものだ。あまり力を入れすぎないこと。いいな？」

「あ……あ……は、はい」

耳まで真っ赤になった瞬のことなどお構いなしに、アフロディーテは薬瓶に煎じた薬を詰め始めた。

瞬は不意に今されたことに硬直し、掌に残った感触を握り締めた。今まで遠いと思っていたこの人が、さりげなく手を重ねてきた。

今はまだ、アフロディーテ本人と話すことさえ気おくれしてしまうというのに、アフロディーテはかつての宿敵だった瞬に対して、見る限り普通に話すし、突然こんなことまでしてきた。

この人は昔のことを気にしていないんだろうか？

瞬はアフロディーテの背中を見て、自分と相手の間に深く横たわる、深い溝のような越えられない過去を感じていた。

——ダイダロス先生……。

瞬は俯く。

「さて。このくらいあれば十分だ。行こうか」

アフロディーテはときばきと鞆に薬を詰めると、瞬にはお構いなしにまたコートを羽織った。

瞬も急いで身支度を整えた。

そしてまたアフロディーテの背中を追いかけて石段を降りてゆく。まだ帰省した者の少ない十二宮の階段を、二人は足早に降りていった。

第四部

孤児院は貧民街にあった。とても小さな建物だった。

ところどころ修復の跡があつて、それでもまだ修繕は必要なほどだった。

アフロディーテと瞬が孤児院に訪れると、子供たちが一斉に中から飛び出してきた。

「聖闘士さまだ！」

粗末な服を着ていながらも、子供たちは目を輝かせてアフロディーテに飛びついてきた。

「君は今日も元気だな。風邪はひいていないか」

アフロディーテは膝を折り、子供たちの目線で笑いかける。

「僕は平気。でもアナイナがジルの風邪をうつされて寝込んでしまったんだ」

「そうか。薬を持ってきた。それから、今日はここで夕食を作っていく」

アフロディーテのその言葉に、子供たちは一斉に歓声を上げた。

そしてアフロディーテの袖や腕を引っ張り、孤児院の中へと案内していく。

はたと、アフロディーテにまわりついていた少女が、瞬の姿を見てアフロディーテに問うた。

「聖闘士さま。あの女の人は？」

「私と同じ聖闘士だよ。今日から君たちの世話を手伝ってくれる。瞬だ」

すると少女は金色の短いお下げを振り乱し、瞬をきつと睨み付けた。

星の子学園で子供に好かれていた瞬は、その少女の挙動に戸惑う。「なんで聖闘士さまと一緒に居るの？」

「仲間だからだよ」

仲間。子供たちの前での口実だろうが、瞬はアフロディーテの言葉に少なからず衝撃を受ける。

「今まで女の人なんて、連れてこなかったじゃない！」

ふくれるお下げの少女を見て、瞬は、ああこの子は、アフロディーテのことが好きなんだ、と察した。

好き？

アフロディーテは少女に何か耳打ちをした。何を言ったのか聞き取れなかったが、耳打ちを受けて少女は、ぱっと明るい表情に戻った。

秘密だよ、とでも告げるように、アフロディーテはそつと唇に人差し指を当てた。

少女は打って変わって満面の笑みになり、アフロディーテの腕に自分の腕を絡ませて、孤児院へ向かった。

孤児院の中は簡素なもので、それでも掃除は行き届いていた。

アフロディーテは六台の質素なベッドがひしめき合う奥の部屋にまず向かった。

「アナイナ。風邪を引いたと聞いた」

手前のベッドに横たわる、痩せこけた少女にアフロディーテは声をかけた。

「聖闘士さま」

鳶色の髪をした少女は、やつれた顔でアフロディーテの訪問を喜んだ。

「薬を持ってきた。熱が少しあるようだな」

アフロディーテは少女の額に手を置く。少女は恍惚の表情で、静かに眼を閉じて言った。

「聖闘士さまにこうされると、楽になります」

それはアフロディーテが、小宇宙をほんの少し掌からかざして、少女の苦しみを癒しているからに他ならなかった。

瞬はその様子をじっと見ていた。アフロディーテも、戦いだけではなく、こんな風に小宇宙を行使することがあるのか…。

「瞬。隣の部屋のジルの様子を見てきてくれないか」

アフロディーテは瞬に言った。

「あ、はい」

ジルという少年が誰なのか解らなかったが、瞬は言われたとおりに隣室へ入っていった。

部屋にはぐったりとした、短髪のそばかすの少年が寝込んでいた。瞬が入ってきたのを見つけると、「誰？」と瞬を見上げた。

「アフロディーテのお手伝いよ。私は瞬。あなたがジル？」

そうだよ、とジルは体を起こした。瞬は慌ててそれを制する。

「駄目よ、寝ていなくちゃ。風邪をひいているのでしょ」

「寒くてたまらないんだ」

ジルは布団を被り直し、赤い顔で瞬を見上げた。

瞬はジルの顔や首筋に、青い斑点があるのに気づいた。

「風邪だけじゃないわね。感染症にもかかっているみたい」

瞬は十二宮でのことを思い出していた。凍りついた氷河を、小宇宙で温めて生還させたことを。

「失礼していいかしら」

瞬は、ジルの額に手を置いた。アフロディーテがそうしたように、瞬も優しい小宇宙を掌に込める。

ジルはおとなしく身を任せていたが、やがて熱と寒気の苦しみが引いていくのに気づき、目を丸くして瞬を見上げた。

「お姉ちゃんも聖闘士さまなの？」

「一応ね」

瞬は今度はジルの首筋の斑点に手を当てた。ゆっくりではあるが、青い斑点は薄くなり、消滅していった。

「…すごいや！」

ジルは飛び上がった。瞬は、だめだめ、とジルをベッドに戻す。

「まだ治ったわけじゃないのよ。アフロディーテが薬を持ってきたから、それもきちんと飲まないと駄目よ」

「ちえ。あれ苦いんだもん」

「アフロディーテは寒い中、あなたたちのために薬草を摘んで、薬を作って持ってきてくれたのよ」

「はい」

ジルは渋々ながらも、素直に返事をした。

「ねえ、お姉ちゃん」

ジルは先ほどの苦しみはどこへやら、ベッドにどかりと座り込んで、瞬に好奇心のまなざしを向けた。

「お姉ちゃん、アフロディーテ様の恋人なの？」

「…えっ!？」

「アフロディーテ様が女の人連れてきたのなんて初めてだよ。ねえ、そうなんでしょ？」

「ち…違うわよ」

瞬は慌てて否定した。

「薬の作り方を教えてもらいに来たの…ただそれだけよ。アフロディーテは私の先生」

言った後ではっとした。私の先生は、ダイダロスだけだったはずなのに。かつての宿敵を、咄嗟とはいえ先生と呼ぶとは、自分でも思わなかった。

「そうなのかなあ」

興味津々でジルは瞬の顔を伺っている。そこへ、アフロディーテが部屋に入ってきた。

「ジル。具合はどうだ」

「あ！アフロディーテ様！このお姉ちゃんすごいんだ、アフロディーテ様と同じことができるんだよ！」

それを聞いてアフロディーテは眉をひそめた。

「瞬」

「あ…私、前にもしたことありますよ。あなたに会う前ですけど」
「…解った。その話はあとで聞く」

そこへ孤児院の修道女が入ってきた。

「聖闘士さま」

「ああ。罹患している子供たちの様子は一通り見た。あとは、この薬を朝晩定時に飲ませるようにしてくれ」

「はい。いつもありがとうございます」

修道女は優しい微笑みでアフロディーテに一礼した。

「それから今日は食材が余っている。子供たちに温かい食事を作ろうと思う」

「まあ」

修道女は更に頭を垂れた。

「聖闘士さまには、いつも何から何まで……本当に、何とお礼を言ったら良いか……」

「気にするな。これが私の仕事だ」

アフロディーテは優しい表情で微笑んだ。

なんて優しい顔をするんだろう。瞬は一瞬、そのアフロディーテの優しい表情に見とれた。

「瞬。君が摘みすぎたのだから、君にはもちろん手伝ってもらうぞ」

「あ…はい」

瞬はアフロディーテの後を追ひ、修道女に促されて厨房に入った。アフロディーテと並んで薬草鍋の調理に取り掛かった。

やがて出来上がると、元気な子供たちは我先にと更に食事を取り合った。

その微笑ましい様子を見て、瞬は星の子学園での記憶を思い出した。

アフロディーテはジルやアナイナ、他の伏せている子供たちに、修道女と共に食事を食べさせた。

瞬もそれに倣って、病気の子供たちにスプーンで口にスープを運

んであげた。

瞬のそんな献身的な様子を、アフロディーテはそつと眺めていた。食事が終わると、子供たちはアフロディーテに組み付いたりかじりついたり、好き放題にはしゃぎはじめた。

「アフロディーテ様、あれやってよ！」

子供たちが急かすと、笑いながらアフロディーテは手の中から薔薇を生じさせた。

子供たちの歓声が上がる。

「アフロディーテ様の手品だ！」

子供たちはそれぞれ芳香のする薔薇を一輪ずつもらい、とりわけ少女たちは一様に喜んだ。

瞬は、その様子をじつと見ていた。

子供たちに囲まれて笑うかつての宿敵。時に人を殺めるこの人の花は、こんな風に子供たちを幸せにする使い方もあるのか…。

「アフロディーテ様、花輪を作って」

少女たちの願いに応じて、アフロディーテは器用に花の冠を作り、少女たちの頭に載せてやった。

この瞬間だけ、孤児院の少女たちは小さな姫君になれるのだった。少女たちは頬を紅潮させて、アフロディーテの首筋に次々と抱きついた。

また来てね、と、元気よく子供たちが瞬とアフロディーテを見送り、孤児院の前で手を振っていた。

瞬とアフロディーテもそれに答え、聖域に帰るために歩き出した。そこへ、お下げの少女が勝ち誇ったように、瞬の前に現れた。昼間のときはしていなかったリボンを、お下げに結いつけて、それをわざと瞬に見せびらかす素振りを見せている。

「まあ。どうしたの、そのリボン」

「アフロディーテ様が私にくれたのよ」

昼間の耳打ちはそれだったのか、と瞬は、そのとき得心した。

「アフロディーテ様は私にだけ良くしてくれるの。結婚するって約束もしているんだから」

少女は得意気だった。

結婚？瞬はアフロディーテを見上げた。

「君が十七歳になって、私以外の男の人と結婚していなければ、という約束だったね」

アフロディーテは少女の頭を撫でた。

「私にはアフロディーテ様しかないもの！他の人と結婚なんかしないわ」

「解った。もう遅いから早く戻れ。君まで風邪を引くぞ」

「風邪を引いたら、アフロディーテ様が看病してくれるもの」

「自分から風邪を引くような子は私は面倒を見ないぞ。さあ行きなさい。おやすみ」

そう言ってアフロディーテは少女の額に口付けた。

少女は飛び上がるように喜び、おやすみなさい！とアフロディーテの頬にキスをして戻っていった。

アフロディーテは瞬に向き直った。

「私たちも戻ろう。すっかり遅くなってしまったな」

「はい…」

アフロディーテの背を追って、瞬は歩き出した。

しばしの沈黙のあと、瞬はアフロディーテに訊いてみた。

「結婚の約束なんてしちゃって、いいんですか」

「ああ、あれか」

「小さな女の子に軽々しくそんなこと、約束するなんて…」

「あの子は私以外のいい相手を見つかるよ」

「そんなの、解らないじゃないですか。あの子はあなたのことが本当に好きみたいです。なのに…」

「十七歳にならないうちに、あの子の方から私を去る」

「なんでそんなこと言えるんですか」

「私がどんな人間か知ったら、みんな去っていったからだ」

「――」

瞬は息を呑んで立ち止まった。アフロディーテのその言葉は、今までの体験に基づいての言葉に他ならなかった。

「あの子が幸せになればそれでいい」

アフロディーテは歩みを止めなかった。が、瞬が立ち尽くしているのに気づいて、振り返る。

「どうした？」

瞬はうつむいた。そしてただ、「いえ」とだけ口にして、もう一度歩き出した。下を向いたまま。

一月の冷気が体を冷え込ませた。だが、瞬は体だけでなく、今のアフロディーテの言葉に、胸まで冷気に透かされるような気がしていた。

十二宮に戻る道すがら、瞬はどこか宿を探します、と言ったが、宛てはなかった。

「付いて来い」

アフロディーテはさっさと歩き出し、街の方角へ向かう。瞬は慌ててついていく。

瞬は、どこか知っている適当な宿に、アフロディーテが案内してくれるのだと思った。場所を教えてもらって別れたら、もちろん自分の手持ちで宿泊代を支払うつもりでいた。

「ところで」

アフロディーテは歩きながら、瞬に訊いた。

「ジルの体を小宇宙で温めていたな」

「あ、はい」

アフロディーテの表情は、心なしか険しかった。

「あまりやるな。君はきつと加減しないだろうから」

「あれくらい……私でも」

「前にもやったことがあると言ったな」

「はい」

「いつだ」

問われて瞬は、十二宮での戦いで、氷河を救った時のことを話した。

アフロディーテの顔が一層険しくなり、やはりな、とため息をつく。

「それで君はどうなった。大方意識を失って、しばらく動けなかっただろう」

「は…はい」

アフロディーテの表情は変わらなかった。

「他の孤児院には、もっと重い病に臥せている子供も居る。君は二度とやるな。いいな？」

「でも…」

瞬の反論をアフロディーテは聞き入れなかった。

「君は自己犠牲が過ぎる」

「なんで、そんなこと」

「君の戦い方を見てきた。解る」

確かに瞬は自己犠牲が過ぎるとよく言われる。自分でも、ときどき自分を顧みず、他者へ尽くしてしまう悪癖があるのは、多少は自覚していた。

だが、アフロディーテはそんな瞬のことも、瞬が知らないうちに見てきたと言っただろうか。

「君がアンドロメダ島での修行で聖衣を手にしたのも、君のそういった生き方があってこそのことだろう」

言われて瞬はどきりとした。

この人がアンドロメダ島の聖衣継承のことについて知っているのは。ただ黄金聖闘士だからであるばかりではない。

この人が、恩師ダイダロスを討つために――

「アフロディーテ、私……」

瞬は胸の辺りで両手を握り締めた。

瞬は唇を噛んで、意を決したかのようにアフロディーテに切り出した。

瞬が立ち止まったのに気付いて、アフロディーテはたと振り返る。

瞬は、アフロディーテが振り返ったのを確かめてから、思い切つてずつと告げたかったことを、口にした。

「私あなたとこうしてお話したかった。でも、ダイダロス先生のとがどうしても納得できないんです。私——」

「……やはりそのことか」

アフロディーテは瞬を見据えた。碧い双眸が、氷のように色褪せながら、それでいてどこか、憂いを秘めたようにも見える。

「正直、今日のあなたは意外でした。少し強引なところもあるけれど、子供たちには優しく、あんな優しい顔をするあなたを、今まで見たことがなかった」

「……」

「子供たちを介抱するあなたの小宇宙は優しかった。戦いの中ではあんなに優しい人だったのに。私はあなたが解らない。」

あなたは、本当は優しい人なんじゃないですか？それなのに、なぜ十二宮の戦いでは——」

瞬の言葉を黙って聞いていたアフロディーテは、ふとまた歩き出した。瞬は慌てて、その後を追う。

「待って下さい」

まだ全てを言い終えていない瞬は、アフロディーテが無視して歩き出したのかと思って必死になる。

アフロディーテが突然立ち止まった。小走りについていた瞬は、その背中に頭をぶつける。

「瞬」

アフロディーテは振り返らずに言った。

「その話をしたいなら、もうしばらく私を手伝うといい」

瞬は驚いて、顔を見上げる。アフロディーテは前を向いたままだ。目線の先には、街角の街灯が煌々と灯っていた。

「私も君に対して、届けるべき物があるんだろっな」

「え…？」

「君が帰ってしまうなら、それでもいいと思っていた。だが君は私の元を訪れた。だからしばらくは付き合ってもらおう。

君が、望んだ回答を、私から得たいなら」

アフロディーテは歩き出した。

そして街角の一角の、小綺麗な宿の中に入って行った。瞬はまたそのあとを追うが、入ってみると、割と高級そうな内観だった。瞬はきよろきよろして、フロントで話をつけているアフロディーテの後ろで、相場はどのくらいだろうとつろたえる。

アフロディーテは手持ちの金で支払いをした。それを見て慌てて、瞬がアフロディーテの腕に飛びつく。

「何してるんですか、払います、自分で」

「いい。行け。じゃあな」

そう言ってアフロディーテは、フロントから受け取った鍵を渡すと、さっさと宿を出てしまった。

「駄目、待つて…！」

瞬は追いかけたが、エントランスの扉が目の前で閉められた。お部屋はこちらです、と案内を促される。

「…」

瞬は、しばらくその場に立ち尽くした。

案内された部屋は清潔感に溢れていて、自分が思い描いていた宿よりもずっと広かった。

宿泊代を勝手にさっさと支払われてしまって、瞬はどうしようも

なく申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

入浴を済ませて、瞬は頭から布団を被った。

アフロディーテのことがわからなかった。

ただ厳しくて、冷淡な人だと思っていた。

今日見た優しい一面。知らなかったあの人の表情。

瞬の胸のうちは、ぐるぐると複雑に掻き乱された。

その晩瞬は、恩師ダイダロスの夢を見た。

優しくった先生。父のように逞しく、幼い瞬を導いてくれた。

夢の中でダイダロスは笑っていた。

『瞬』

何かを言った気がした。

夢のダイダロスが瞬に何かを言ったが、それは聞き取ることができなかった。

「先生」

瞬はダイダロスを追いかけた。

「先生、なんて言ったの。もう一度言って下さい、もう一度――」

瞬が手を伸ばしたとき、花霞の中にダイダロスは消え去ってしまった。

薔薇の花びら。

はっとして瞬は目を覚ました。

天井に伸ばした手は虚空を掴んでいた。

瞬は、自分が泣いていることに気がついた。

ひとすじの涙が頬を伝う。

先生は帰ってこない。

その先生を殺めた男の元に、今私は戻ってきてしまった…。

第五部

早朝薔薇の手入れをしながら、アフロディーテは昨日から考えていることを反芻していた。

瞬がまさか戻ってくるとは思わなかった。

瞬が帰国する時、それがきつと別離になると思っていた。

復興時から、アフロディーテは瞬のことを気にかけていた。いや、それより前からだったかも知れない。

瞬は十三歳という幼さでありながら、一度十二宮でこの自分と相打ちするほどの力を発揮したのだ。

アフロディーテはあの時、奇跡的とはいえその力を見事だと思っ
たし、実際そう言った。薄れゆく意識の中で。

戦士として瞬の力に驚かされたのが出会いだったのかも知れない
が、本来それだけで終わるはずだったのだ。

だがこうして、世界は神の因果律を乱し、自分も仲間もすべての
聖闘士も、その渦に巻き込まれて、気がつけば今までの出来事は他
人事のように、自分はまたここに戻ってきた。

そして瞬と再会してしまった。

復興時、アフロディーテは瞬に声を掛けたことがある。

何の因果だとしても、青銅の中では一番縁のあった相手だ。

——それがたとえ、因縁であったとしても。

アフロディーテはダイダロスを討った。瞬と拳さえ交えてきた。
だから良い関係になれるとは思っていなかったと思う。別に望ん
でもいなかったと思う。

ただ、再会の折に声を掛けたのは、理由はどうあれ強い縁がそう
させたのか、無意識にそうしただけだった。

そのとき瞬の方は、一瞬笑ったがすぐに気まずそうな様子をして、
いたたまれなくなったように、一言二言言葉を交わしただけで去っ

ていった。

それから聖域の復興で顔を合わせることはあっても、瞬の方からアフロディーテに接触してくることは、必要なときだけしかなかった。

アフロディーテはそのとき、瞬とはそれで良いのかも知れない、と思った。

瞬と自分の間に横たわる、さまざまな因果はきつと解消できない。もしも出会い方が違って、過去の因果がなかったら、アフロディーテは瞬を懇意に可愛がったとは思う。

瞬は素直だし、きつと自分がやっているような仕事に向いているとも感じていた。

聖域で今まで何人かの後輩を指導してきたが、アフロディーテのしていることややることに素養のあったものはそう居ない。

そういう意味では瞬は、アフロディーテと非なりながら、きつと何もなかったら、良い後輩分になったかもしれないと、復興時思ったことはよくあった。

ただ瞬はダイダロスの件を今でも強く胸に抱いているのだとも、瞬を見ていて思っていた。

自分がしたことだ。詫びるつもりもないし詫びる筋もない。

自分と瞬は強い因縁がありながら、それゆえきつと距離は永遠なのだろうと思っていた。

それが、瞬は戻ってきてしまった。

向こうから、涙を流して。

泣くほどにダイダロスのことが胸に痞えていたのだろう。

きつと今までも、そうして一人慕った師のことを思って泣いてきたのだろう。

幼さは純粹で、納得がいかなければ先に進めない。

だから瞬はここへ来たのだ。自分の心に決着をつけるために。アフロディーテは白み始めた空を仰いだ。

——自分にもそんな時期があった。

十三年前。まだとても幼かった時分。自分はまだ齡九つだった。アイオロスが死んだ日。

教皇の仮面の下、行方知れずだったサガの顔を見たあの夜。

昨日のように朝から緊急の秘密裏の討伐の命もなかった今朝は、ちょうど日曜日で街の仕事もなかった。

こんな日は大抵下から声がかかる。

ちょうど昨日、シユラとミロも帰国して、夜のうちに戻ってきていた。

復興時から瞬は、磨羯宮で鍛錬を施してもらっていたし、きつと、双魚宮へ向かっている瞬が、天蠍宮か磨羯宮で足止めを食らっているところだろう。

そう思っアフロディーテは、いつもより早く石段を降りていった。

磨羯宮の石段の踊り場には、果たしてミロに親しそうに話しかけられている、瞬の姿があった。鍛錬の準備をしながら、シユラがアフロディーテに気付いて手を上げる。

「おはよう」

シユラの挨拶に答えると、瞬もミロもアフロディーテに気付いて朝の挨拶をした。この二日間で戸惑ってばかりだった瞬は、思い切り体が動かせる機会に恵まれたことに、寒さの中でも上気し始めている様子だった。

四人は広場へと向かった。

「さあ、今年も早速始めるかな。休みすぎてなまりたくないからな」
ミロは早く体を動かしたくてたまらない様子だった。

そんなミロに対し、シユラは一つと提案をした。

「どうだ、ミロ。せっかく瞬も来ていることだし、今日は瞬と手合
わせしてみないか」

「こいつと？」

拍子抜けしたようにミロはシユラと瞬を見る。

「お前瞬と手合わせしたことはなかっただろう。なかなか筋が良い
ぞ。俺とアフロディーテが監督するから、試しにやってみるといい」

「ほう。手加減するのは性に合わないんだがな」

「手加減など要らぬ。ただ、これは鍛錬だ。爪や技は控えてくれよ。
実践ではないのだから」

「おうよ」

簡単なストレッチを始め、ミロは準備を整え始めた。瞬もそれに
倣う。アフロディーテが瞬の柔軟を手伝った。

鍛錬前の柔軟で形で体に触れたことは、もちろん兄の一輝だ
けでなく、星矢にも氷河にも紫龍にもあった。だがアフロディーテ
が瞬の体に触れたのはこれが初めてで、瞬は思わず意識してしまう。
鍛錬だというのに。私は何を考えているのだろっ、と、瞬は心な
しか顔を赤らめた。

「それじゃ行くぞ。手加減なしでいいんだな？」

十分に体を解したミロは、組んだ拳を鳴らしながら意気込んだ。

「お願いします」

瞬は一礼してミロと対峙する。

シユラの合図でミロと瞬の稽古が始まった。ミロは、一瞬にして
瞬の背後を取る。

さすが黄金だが、ミロが拳を放ったとき、瞬はそこに居なかった。
俊敏さに長ける瞬はミロの背後を取り返していて、シユラに教わっ
た通りの体術を繰り出そうとする。

空を切った拳にミロは刹那驚いたが、瞬の動きを瞬時に見切り、

組まれ掛けた技を交わして瞬を投げ飛ばした。そして空中で回転して受身を取って地に降り立った瞬の懷に、咄嗟に入り込んで拳を叩き入れる。それを瞬は、小さな手でしっかりと受け止めた。

ミロの眼光が輝き始めた。こいつは楽しい。ここまで出来る奴だとは思わなかった。

好戦的になるとミロは技も勢いもどんどん鋭さを増した。シユラとアフロディーテがむ、と息を飲んだことにも気づかず、ミロは瞬との組み手を加速し続ける。

手加減なんか要らない。稽古でこんなに楽しいのは久々だ。おい、止まれ、というシユラの声さえミロは無視した。

最高だ。こいつがどこまで出来るか。ミロは興奮さえして、口許に薄ら笑いさえ浮かべる。徐々に防戦一方になっていく瞬。それでもミロの攻撃に追いつこうと、瞬が拳を繰り出したその時、瞬の動きに一瞬の隙が生じた。それをミロは見逃さなかった。

もらった、とミロが一撃を叩きいれようとしたその手を、アフロディーテが後ろ手に掴んだ。

「そこまで。やりすぎだ」

アフロディーテは眉を吊り上げている。ミロははつと我に返った。「最初から飛ばし過ぎだ、ミロ。おまけに半分本気じゃないか」呆れたようにシユラが嘆息した。ミロははたと一瞬呆け、尻餅をついている瞬を見下ろした。

「あはは……やっぱりすごいですね、ミロ」

瞬は脱力しながら笑った。ミロはそこで初めて正氣に戻る。が、興奮は醒めやらなかった。

「お前、やるじゃないか」

ミロはがっしりと手を握って、瞬を立ち上がらせた。

「こんなに楽しい組み手は久々だ。こいつ凄いな」

「だがこれは何だ」

アフロディーテは掴んだミロの手をぐいと引き上げて怒気をはらむ。ミロの指先から、小宇宙の波動と共に爪が伸びかかっていた。

「あ…」

「鍛錬でなぜ爪が出ている。私が止めなければ、どうなっていたか解っているだろうな？」

「出さないようにしてたんだが」

「出ているじゃないか」

「悪い。自分でも気づかなかった」

そんな馬鹿な話があるか、とアフロディーテは怒った。黄金にあるまじき失態だ。

「しかしミロは今までこんなことはなかったのだから。そんなに瞬との組み手が楽しかったか。無意識に本気を出すほどに」

「ああ、楽しかった。でもちゃんと手加減はしたぞ？」

「手加減してなぜ爪が伸びるのだ」

アフロディーテの険しい顔は戻らない。瞬は、困ったように三人を見上げるばかりだった。

「おい、瞬。お前ここに居る間、これから俺たちと鍛錬しろ。お前のような動きをする相手は初めてかもしれない。俺に付き合え」

アフロディーテの注意と怒りを手で振り払い、ミロは瞬に言った。

「お前も楽しかっただろ？」

「はい」

瞬は笑ってミロに応えた。瞬自身も、今の組み手がとても楽しかった。

「こいつを育てるのが楽しみだ。そうと決まれば次行くぞ」

ミロは次の組み手に向けてもう逸っていて、時間さえ惜しい様子だった。

充実した一日を終えた夜、アフロディーテは午後の病院の仕事を終わらせると、瞬をまた宿まで送っていった。

途中の郵便局に用があると、アフロディーテは瞬に言った。

「ちよつと待っている。すぐ終わる」

言われて瞬は、郵便局の前で、アフロディーテが出てくるのを待った。

『母様』

ふと、突然子供に手を掴まれた。

驚いて見下ろすと、泣きじゃくる少年が、瞬の手を掴んだまま見上げている。

見目麗しい子供だった。 齡九つくらいだろうか。

秀麗な相貌を歪めて、少年はわんわん泣き出した。 瞬は慌てて、跪いて少年を慰める。

「どうしたの？」

『母様が居なくなっちゃった』

少年は泣き続けた。 瞬はハンカチで少年の涙を拭ってやりながら尋ねる。

「はぐれてしまったの？どこで？」

『わからない』

少年はただ泣いている。

「お母さんはどんな人？一緒に探してあげる」

少年は泣きながら、掴んでいたリボンの切れ端を持ち上げた。

『はぐれないように母様が結んでくれた。でも母様はいなくなっちゃった』

瞬は、その少年の左手に、破れたリボンを結び直してやった。

すると少年は、はつとして瞬の顔を見る。

『結んでくれた』

左手に結いつけられたリボンを掌で確かめ、少年は言う。

『見つけた。この人だ』

「……え？」

何を言われたのか解らず、瞬はきょとんとする。 少年は瞬に頼み込んだ。

『母様も同じものを持つてる。探して、お願い』

少年は瞬を見上げて訴えた。瞬は少年の手を握って立ち上がった。
「いいよ。お母さんが行きそうな場所とかはある？」

少年は、わからない、と言いながら、それでも瞬の手を引いて歩き出そうとした。

「待って、今お兄さんもいるの、一緒に」

『だめ。男の人はだめだって、言われた』

そう言って少年は、瞬の手を懸命に引っ張る。

待って、待ってと瞬が嗜めているとき、用事を済ませたアフロディーテが郵便局から出てきた。

「その子は？」

「アフロディーテ。この子、迷子みたいなんです」

瞬に話しかけたアフロディーテを見て、少年はさっと顔色を変える。

「どうした。親とはぐれたのか」

少年が泣き腫らした顔をしているのを見て、アフロディーテはその頭を撫でようとした。が、少年は恐ろしいものでも見たように青ざめ、その手を振り払う。

そして、わんわん泣きながら走って行ってしまった。瞬は追いかけようとしたが、雑踏にすぐ少年の姿は掻き消えてしまった。

しばらくその少年を探したが、結局見つからなかった。

二人は近くの交番に、迷子がいるので搜索を頼む、と、さっきまで居たはずの少年の特徴を伝えて、仕方なくその場を去った。

少年は泣きじゃくりながら、黒装束の巫女に、頭を撫でられていた。

「よくやった」

『見つけた……見つけたの、結んでくれた人』

少年は、瞬が結んでくれたリボンを右手で握り締めながら、嗚咽を繰り返している。

『一緒に母様を探してもらえたのに。男の人が』

「それで良い。男は駄目だ。女で、そなたの手に結い付けてくれる者。今はそれが見つかれば、良い」

黒装束の巫女は、目深に被ったフードから覗く口許を歪ませた。

『母様にはいつ会えるの……？』

少年は不安そうに、巫女を見上げた。

「時が満ちれば、そなたは力の一部を取り戻す。

再び、結い付けてくれた女を探すのだ。一人の時に連れて来い。

男が居たら、駄目だ」

第六部

翌朝、早くに目が覚めた瞬は、早々に宿を出て聖域に向かった。

騒ぎがあつたのか、街はざわめき立っていた。

テロだろうか、と瞬は気になりながら、聖域への道を進んだ。

昨日のように白羊宮もの金牛宮も双児宮も無人で、瞬は一瞬戸惑ったが、一番上の双魚宮を目指して、再び歩き出した矢先、巨蟹宮に小宇宙を感じた。

その一種異様な小宇宙は、まごう事なきデスマスクのそれだった。

瞬は、巨蟹宮の中へと入っていった。

「デスマスク」

宮の奥からでも瞬の透明な小宇宙を感じたデスマスクは、意外そうに顔を出した。

「アンドロメダじゃねえか。またここに戻ってきたのか？」

「はい。デスマスクも帰られていたんですね。おかえりなさい。シリア島はどうでした？」

「久々に遊び倒した。まあ正直なところ、まだ羽伸ばし足りねえかな」

デスマスクは十二宮の中で、一番休暇を長くとっていた。それでもまだ足りないらしい。

「それで。お前は何しにここへ戻ってきた」

「え、えっと…」

瞬は、アテナへの届け物のことを話した。が、デスマスクは顎を撫でながら、言った。

「ふうん。でもそれだけじゃねえだろ」

「……」

デスマスクはこういうところで勘が鋭い。この人に対して、瞬はなぜか隠し事ができない。すべて、見透かされてしまうのだ。

「えっと……あの……」

瞬はしばらくためらっていたが、アフロディーテの元で薬学の手ほどきを受けていることを伝えた。

するとデスマスクは、一瞬目を点にしたが、いきなり大声で笑い出した。

瞬はぎよつとする。

「ははは！そりゃあいい！そんなことならもつと早く帰ってくるんだった」

「な、何ですか？」

デスマスクは笑い続けながら、目に涙さえ浮かべて腹を抱える。

「あいつを最近からかうネタがなくてな。こりゃいい、最高だ」

デスマスクはまたよからぬことを考え始めたようだった。瞬は慌てて、デスマスクを嗜める。

「そんなことしたらアフロディーテがものすごく怒りますよ！やめてください、第一……来たのは私の方です……アフロディーテには悪いと思っています」

「おい、ちよつと寄っていけよ」

デスマスクはにやにやしながら、抵抗する瞬を自分の生活区に連れ立った。

「いいです。双魚宮に行つて、アフロディーテに、今日手伝えることはないか聞きに行くところですから」

「あいつなら朝早くここを通つて出て行つたよ。偵察だとか言っていた。戻るまでここに居ろよ」

「え……いないんですか、今」

「ああ、だから、な、まあ入れて」

瞬を生活区に招き入れ、デスマスクは興味津々だった。無理矢理テーブルに付かされた瞬は、ふくれながら嫌です、と横を向いた。

「聞かせるよ。代わりに俺からも面白い話を聞かせてやるぜ」

デスマスクの言葉に、瞬は心が一瞬揺らいだ。

そつえば、デスマスクとシユラとアフロディーテは同期なのだ。

何か、恩師ダイダロスの事件のことも聞けるかもしれない。

「下世話な話は嫌ですからね」

瞬は渋々椅子に座り直した。

デスマスクは瞬に茶を振舞った。デスマスクが瞬に、こんな風に気を利かせるのは初めてのことだった。もちろん、話を根掘り葉掘り聞きたいという下心あつてのことだ。

「で。何がどうしてこうなってるんだよ？」

デスマスクの方は朝から酒を注ぎ出している。朝から……と呆れる瞬に、デスマスクは目を輝かせて瞬の言葉を待っている。

瞬は仕方なく、ここへ来た経緯をぼそりぼそりと説明した。

復興中はあまりアフロディーテと話せなかったこと。

話したいと思っていたこと。知りたいことがあったこと。

アフロディーテの提案で、仕事を手伝うことになってしまったこと。

そして、ダイダロスの件で、複雑に心が掻き乱されていること――

説明は覚束なかったが、幼く純粋な瞬は、自覚なしに正直にデスマスクに色々胸のうちの吐露してしまっていた。

一通りデスマスクは話を聞くと、顎を撫でながらはあんと得心したような顔をした。

「お前、あいつに惚れてんだろ」

デスマスクの言葉は青天の霹靂だった。瞬は、最初彼が何を言い出したのか解らなかったが、一瞬の時を置いて、衝撃に身を貫かれて椅子から飛び上がる。

「そ……！そんなわけないじゃないですか！」

「じゃなきゃあ泣き腫らしてここへ戻ってくるかよ。あいつに会い

「たかつたんだろ」

「だから……私はあの人と戦わずに済む方法はなかったのかって……！」

「そんなもんあるわけねえだろ。あの時俺たちは俺たちの正義でここを守った。お前らもお前らの正義で俺たちに挑んだんだろ」

「……」

「まああのときのことは、ここ一年でさんざん語り尽くした話だ。お前も納得はしたんだろ？取るべき道は違ったが、結局俺たちは本懐が同じだったってことは」

「まだ……解らないことはありませんが」

瞬の言葉に、デスマスクは仕方ねえな、と鼻で嘆息した。

「お前はまだガキだから、俺たちがどうしてこの聖域を守ってきたか、まだ解らねえだろよ。」

まあ、それは仕方のないことだ。もう少しお前が大人になったときに、機会があればいくらでも話してやる。

だがまあ、お前がアフロに惚れているのは間違いない話だ」

「そんなことありません！だって……だって！アフロディーテは、私の恩師を……」

「だから、そこなんだろ」

デスマスクは瞬のカップに茶を注いだ。ぶっきらぼうな態度でいながら、こういうところでさりげないのがデスマスクの猾いところだった。

「お前はそこに拘泥している。まあ無理もないだろうよ。親同然の師匠を殺した相手だ。俺だったら殺したいし、死んでも恨むだろうな。」

だがお前はそれでもあいつに会いに来た。理解したいとか、そういう感情は俺には解らねえ。

お前は戦士のくせに甘ちゃんだ。戦場に居ても、戦いを好まないとか抜かしやがる。

だがな、そういうの抜きにしても、お前がアフロのことを理解し

たいていうのは、お前があいつに惚れてる証拠だよ。

ただダイダロスのことだけが前心の邪魔してる。それだけだ」
デスマスクの言葉は一言一言瞬を貫いた。瞬は矢継ぎ早に放たれるデスマスクの言葉を、受け止めきることができなかった。

「あいつの話をしてやるよ」

グラスの酒をくいと飲み干し、デスマスクが言った。瞬は顔を上げる。

そして慌てて思い出したように、瞬はデスマスクのグラスに酒を注ぎ、上目遣いに彼の言葉を待った。

「俺とシユラのあとにあいつが聖域に来てな。あいつが初めて任務で人を殺したのは、十二くらいの頃だった。ちょうど、今のお前と大して変わらない時分だな」

瞬は黙ってデスマスクを見つめる。

「その頃、反教皇派の逆賊の襲撃がひどくてな。特に、討伐に向かった女聖闘士がひどい返り討ちに遭っていた。最初は俺たちが行くはずだったが、アフロディーテがそれを買って出たんだ。

反教皇派の頭は下衆な野郎だったよ。アフロディーテはああ見えて、正義感は一倍感強いんだ。意外かも知れないが、誰よりも平和を願う気持ちは強い。

アフロディーテは一人で行くと言い張ったが、俺とシユラは教皇の命で、気づかれないように密偵として補佐に回って後を追った。行ったところでアフロディーテは満身創痍だったが、頭をしっかりと仕留めていたよ。初めての任務にしては、上出来だった」

デスマスクは心なしに遠い目をして天井を少し仰いだ。

「だがな。初めての殺した。しばらくあいつは精神的に参っていた。もちろん、それを悟られないように必死で平静を装っていたが、弟分だ、俺たちには解る。やがてあいつは初めて言ったんだ。憔悴しきった顔で、『苦しみながら死んだ相手の顔が忘れられない』ってな」

瞬は息を呑んだ。デスマスクは続ける。

「俺からすればよ。女や仲間になんか、四肢を引きちぎってもまだ殺し足りねえ。」

あいつも言ってた。任務を買って出たときは、同胞の聖闘士の恨みを何倍にも返して晴らしてやると憤っていたのに、いざ殺してみると、愕然としたんだそう。自分の毒が想像以上に相手を苦しめ、いつまでも死ななかったことに」

「……！」

「最初の怒りも消え失せて早く相手を楽にしてやろうと、アフロデイーテは何本も薔薇を相手に撃った。だけど、黄金とはいえまだ駆け出したから。力はあっても、それを実践で制御する能力がまだ追いついていなかったんだろう。何十本の薔薇を受けて相手が息絶えたのは、何時間も経ってのことだった。」

生殺し、だな」

デスマスクは今度は自分で手酌して、酒を注いだ。

「そのことがあってから、あいつは自分の武器である薔薇の作り方を、小宇宙で必死に模索し始めた。相手になるべく苦しまずに、安からに死ねるように。そうして出来たのが今のあいつの完成形だ。」

お前なら、痛いほど知っているだろう」

はっとして瞬は、目を見開いた。

そう。知っている。初めて対峙したとき。初めて受けたアフロデイーテの薔薇は、死への誘いでありながら、夢のような安らぎと共に、永遠の眠りへ誘い込む術式……。

「俺は、下衆な相手には生殺しの薔薇でもいいと思うと言ったんだがな。そこはあいつの性格だ。どんな相手でも、あいつは楽に死ねるように完成形の薔薇しか使わなくなった。」

あいつはそういう奴だ。ま、殺しに平和主義も何もあったもんじやないと思うがな、俺は」

「……」

デスマスクは瞬のカップに茶を継ぎ足した。話を聞いていて、瞬はほとんど飲んでいないので、カップから茶が溢れそうになる。

「あいつは生真面目な奴なんだ。教皇の勅命とあらば、仕事はどんなことでもしつかりこなす。」

「だがな。俺と違って、あいつが今までしてきたことに、葛藤が無かったと思うか？」

「え……」

瞬の心が脈打った。

「涼しい顔をして、淡々としているように見えるけどな。俺たちには解るんだよ。幼い頃はあいつの心の叫びが、この巨蟹宮までもよく小宇宙で届いたもんだ。おかげで眠れやしねえ日がよくあったよ。お前あいつを知りたいんだろう。お前はまだガキだ。解らないことは今はたくさんあるだろうよ。だが時間をかけてあいつを知ればいい。長くここにいといるといいさ」

デスマスクはにやりと笑った。

「これから楽しくなりそうだしな」

その日瞬は、デスマスクにさんざん振り回されて一日を過ごした。買出しに行ったり街を連れ回されたり。瞬は何度も否定したが、デスマスクは瞬とアフロディーテを懇意にしたくてたまらないようだった。

街は朝方そうだったように、人だかりがあちこちに出来ていて、至る所で救急車や何台も走り、警察の姿が見受けられた。

「テロ……ですかね？」

首を傾げる瞬の隣で、デスマスクは眉を顰めた。

「冥闘士の残党兵がまた出たんだろうな」

「え……」

驚いて瞬は、デスマスクを見上げる。デスマスクは人だかりを見詰めたまま、小声で言った。

「一般には現段階でテロと報道されているが、一連の事件は、実は冥闘士が動いてる。」

半年前から目立つようになった。この騒ぎも、冥闘士の術で心神喪失状態になった市民が、暴動を起こしたところだ」

「半年前って……そんな話、復興をお手伝いしていた時には、一度も聞いたことがありません」

「知らなくて当然だ。候補生たちを不安にさせないように、黄金の中で密偵業専門の俺たちが、秘密裏にたまに潰していた程度の話だから。公にはされてねえよ」

「……」

冥闘士、という単語を聞いて、瞬は複雑そうに眉を顰めた。

残党兵の動きがあつて、秘密裏にデスマスクたちがそれを討つていたなんて、復興時は微塵も気付かなかった。

「冥闘士なんて……もう、聞かなくて済む言葉だと思ってました」

俯く瞬に対し、デスマスクは小声で、言うなよ、と言った。

「俺はひと波乱あると睨んでるよ」

淡々とした表情で、デスマスクが言った。

「…何か起こると言うんですか？」

「ああ」

不安げに見上げた瞬に対して、それだけデスマスクは呟いた。

食材を嫌というほど買い込んだデスマスクは、買ってきたものを瞬に詰めさせた。

「こんなに食べ切れるんですか」

「アフロディーテの分だよ。あいつが帰ってきたら食わせてやれ」

瞬に詰めさせた差し入れを包み、デスマスクはそれを持たせた。

「それとな」

デスマスクは今日、初めて神妙な表情になつて言った。

「もし俺がお前の立場だったら。俺は師を殺した相手を自分のものにするだろうな」

えっ、と瞬は驚いて顔を見上げる。

「気の済むまでやり返して。やり返してやり返して。でも、自分がそれでもそんな相手に惚れちまったら、力づくで自分のものにする。俺ならな」

「…」

瞬の顔が赤くなつた。デスマスクは可笑しそうに笑う。

「ガキにはこういう話は早い。早く大人になれ。俺の楽しみも増える」

「だから、からかわないで下さい！」

瞬は、アフロディーテへの差し入れの包みを抱えて背を向けた。

「そんなんじゃ…ありませんから。…本当に」

瞬は振り返つて、今日はありがとうございましたと礼を述べ、巨蟹宮で上と下に別れた。

デスマスクは笑いながら、また来いよ、と瞬を嬉しそうに送り出し、夜の偵察へと出て行つた。

第七部

双魚宮の前で石段に座り待っていた瞬は、近づく小宇宙を感じ取って、立ち上がった。

が、それはアフロディーテのものではなかった。

『たすけて…』

はっとして瞬は、そのかすかな波動を追って飛び出した。

女の子？

瞬はきよろきよろと辺りを見渡した。が、波動は断続的で、とてもかすかで、断片的にしかとらえることが出来ない。

瞬が辺りを見回していると、アフロディーテが戻ってきた。

「アフロディーテ」

瞬はアフロディーテに歩み寄る。暗い宮の石段の上で、アフロディーテの立ち姿が月光を背に、その表情は見えない。

「おかえりなさい… あっ」

瞬はアフロディーテのそばに近づいて、彼の衣服に血が付いているのに気づいて青ざめる。

「血が…！どうしたんですか！？」

アフロディーテは静かに瞬を嗜めた。

「ただいま。これは返り血だ。私なら無傷だよ」

だが瞬は、その血からわずかに立ち上る小宇宙を感じ取り、それが先刻感じた少女らしきものと同じだと読み取ると、はっと顔を上げてアフロディーテを見つめた。

「何があっただんですか？ただの偵察じゃなかったんですか？」

「慌てるな。心神喪失した市民に突然襲い掛かれたのを制しただけだ。その市民も今は、聖域が監視する病院に身を預けてきてある」

「女の子…ですか？」

瞬が問うと、アフロディーテは一瞬言葉を飲み込んだ。

「そうだが…」

「今声が…聞こえたんです。女の子の声で、助けて、って…」

その言葉を聞いて、アフロディーテは瞬を見つめた。

この子は、小さな市民の声まで小宇宙で捕らえる力を持っているのだろうか。血から立ち上る小宇宙を見てその人間が、どんな相手が解るといふのだろうか。

聖闘士としてそれは危険だった。

自制する力がなければ、数多の人間の声が勝手に飛び込んできて、精神を正しく保つことができなくなってしまう。

アフロディーテは、自分が考えていたより瞬がとても、恐ろしく繊細な感性の持ち主であることを知った。

「大丈夫。経過は見守らなくてはならないが、その少女なら無事だ。これから、アテナにこのことを報告しに行く」

アフロディーテはそのとき、寒そうに瞬が震えているのに気がついた。

「もしかして、ずっと外で待っていたのか？」

「はい。勝手に入ったら悪いと思って」

「…馬鹿だな。寒かっただろう。今度からは勝手に入ってい。先に帰って暖炉に火を起すくらいのこととはしてもいいんだぞ」

「あ……ごめんなさい、気が利かなくて」

入れ、とアフロディーテは瞬の背中を押した。温かい手に肩を押されて、瞬は少しどきりとする。

「君が来ると思って、ここに書き置きをしておいたんだが」

アフロディーテは林の中の小さな仮住まいに入ると、テーブルの上に置いた紙切れを丸めた。それを聞いて瞬は驚く。

「そうだったんですか？ごめんなさい」

「いい。今日は朝から緊急の仕事が入ってな。一日持て余さなかったか」

「あ…はい。デスマスクが、巨蟹宮でアフロディーテは朝から居ないうって教えてくれて、お買い物とかのお手伝いしました。これ、デ

スマスクがアフロディーテにつて。お夕飯です」

瞬は抱えていた包みを持ち上げて示した。

「ありがとう。着替えるからそこに置いておいてくれ」

「はい」

瞬は示されたテーブルの上に包みを置き、アフロディーテが別室に居る間に、それを広げた。

ふとデスマスクに言われたことを思い出して、瞬は顔を赤らめる。

『お前、あいつに惚れてんだろ』

そんなはずはない。瞬はかぶりを振る。

ダイダロス先生の仇。でも子供たちには優しい人。でも、ダイダ

ロス先生の仇…

部屋から出てきたアフロディーテを見て、瞬は慌てて下を向く。

そんなはずがない。そんなはずは。

アフロディーテは暖炉に火をつけた。

「当たれ。アテナに報告をしてくるから待っている」

それだけ言つてアフロディーテは双魚宮を出て行った。

瞬は座り込みながら、アフロディーテの背中を眼で追った。

「アテナに命じられたとおり、例の貧民街に赴いたところ、市民の強襲を受けました。心神喪失状態の市民が十人。うち一人のみ、まだ年端も行かない少女でした」

アフロディーテは緊急の報告をアテナに告げていた。

「市民を傷つけないよう、毒気を抜いた薔薇で眠らせ、九人は制しましたが、一人少女の様子が違いました。何者かに操られている…いえ、あれは憑依状態でした。少女本人の小宇宙とは思えぬ力を有しており、制するのに軽症を負わせてしまいました。私の不手際です」

「いえ。しかし、憑依……」

「は。その少女は今、聖域監視下にある病院で保護させました。明日またその少女の様子を見て参ります」

「アフロディーテ。その少女に憑依していた小宇宙の主は解りますか」

「申し訳ありません。今のところまだ私には掴みきれていない状態です」

「解りました。そして、あなたから見て、その少女はどんな」

「一市民ではありませんが、靈感体質のようでした。それほど大きな器ではありません。憑依していた小宇宙も、その少女の体に入り込むには大きすぎて、一部精神を乗っ取っていた程度に思われます」

「そうですか……これは、緊急に対処せねばなりませんね」

アテナは複雑な思いで、眉を顰める。

「ハーデスを討った今、神々も混乱しながら事態は収束してしましたが。例の不穏な小宇宙の干渉と、これは明らかに関係しています。何者かが、『依り代』を探し、再び混乱を起こそうとしているのだと私は思います」

アフロディーテはアテナの言葉にはつとずる。

「アフロディーテ。あなたにお願いがあります」

アテナはアフロディーテに向き直った。その表情が厳しい。

アフロディーテはアテナの言わんとすることを察した。

「あなたも知っている通り、瞬はその魂の清さから、ハーデスの依り代となった事態があります」

「……」

ハーデスの依り代。瞬が一度そうなったことは、アフロディーテも耳にしていた。

その話を聞いたときから、アフロディーテは少々瞬のことが気がかりだった。

……あんな年端もいかない少女が。神の器としてすべてを奪われる。

さつき、市民の声まで聞き分けてしまった瞬の顔が目には浮かぶ。

アフロディーテはじつと床に目を落とした。

「突然の訪問に驚きましたが、瞬が今、ここにいるのは好都合です。もし日本に居たら、私の力の届かないところで、あの子が依り代となっていたかもしれません。この不穏な小宇宙の正体は何であるかはまだ解りませんが、あの子を再び、神の依り代にするわけにはいきません。」

アフロディーテ。あの子を守ってくれますね？」

「御意」

アフロディーテの言葉に、アテナはふと表情を緩めた。

「あの子をお願いします。私は今から、聖域の結界を強化します。」

アフロディーテ、よろしくお願いしますよ」

「は……」

アフロディーテは頭を垂れた。アテナが退室するまで、アフロディーテはじつと動かずに頭を下げていた。

双魚宮に戻ると、瞬は先ほどアフロディーテが丸めた書置きを広げて見詰め、暖炉の火に当たっていた。

「何している」

書置きを取り上げて、アフロディーテは訊いた。

「アフロディーテってどんな字書くのになって思っ

きれいな字ですね。」

あと、筆跡からもその人の小宇宙が感じられるじゃないですか。それで」

瞬の言葉を聞いて、アフロディーテは彼女を見下ろした。

やはりこの子は、感受性の強さから、無意識にさまざまな波動を拾い上げてしまっている。

アフロディーテは瞬の隣に座り、顔を近づけて言った。

「私のことを知りたくてここに来たんだろう。」

なら、話して知ればいい。こういうことはするな」

アフロディーテが顔を近づけるので、瞬は思わず少し後ずさった。

「君は、無意識に色々な波動を拾ってしまう体質らしいな。」

今アテナにも、君を改めて頼むと念を押されてきた。

君は神をも降ろしてしまう極度の憑依体質だろう。

今まで、人の声が精神に入り込み過ぎて、混乱したことはないのか」

「え……何でわかるんですか」

言い当てられたことに驚く瞬に、アフロディーテは溜息を付く。

「それでは駄目だ。精神が持たない。人の話を聞くことは大事だが、無差別に小宇宙を拾い上げるのは聖闘士として危険だ。原子の次元から霊的な次元まで、さまざまな小宇宙を操る聖闘士が、外の力に左右されて自分を見失えば、いずれ精神が暴走してしまう」

言いながらアフロディーテは、サガのことを思い出していた。

彼の場合は自分の強すぎる二面性からそうだったが、外からの強力な力で精神をゆがめてしまう力なき市民たちも、これまでよく見てきた。今日制した少女だってその一人だ。

誰にもそうなってほしくなかった。サガを見てきて、葛藤の中でそれでも、彼に仕えてきた彼としては。

どんな形であれ、もうあんな風に自分を失う人間を、これ以上見たくなかった。

アフロディーテはそっと、瞬の顔に触れた。

どきりとして瞬は逃げようとしたが、動くなと言われて硬直する。「保護の小宇宙を施す。じっとしている」

アフロディーテは真剣な目で、そっと掌から透明な波動を生じさせる。

瞬はぎゅっと眼を閉じた。

頬に伝わる小宇宙が全身を包み込んだ瞬間、瞬は水の中で洗われ

たような感覚がした。

「もういいぞ。数日間で消えるが、しばらく君は低級な外の声からは、守られる」

「…何でこんなこと、してくれるんですか」

目を開けて、恥ずかしそうに瞬は訊いた。

「私も昔そうだったからだよ」

思いがけない言葉に、瞬は目を開けて相手を見る。

「先ほど病院に搬送した少女も、そういう少女でな。明日一緒に、少女を見舞ってくれるか？」

「はい」

「では一緒に行こう」

しばらく二人は暖炉の火に当たった。

沈黙が流れた。瞬は、少し居たたまれなくなつて、何か話そうと思つた。

「…アフロディーテも、人の声がいつぱい頭の中に入ってきてちゃつて、困つたことあつたんですか？」

「ああ。昔はな」

「今でもそうなることがありますか？」

「今はあまりないな。私は我侘な性格だし、何より、子供の頃から比べて、随分変わってしまったから」

「アフロディーテが我侘だなんて……信じられないです」

「私は我侘だよ。一緒に居ればそのうち解ると思う」

「昔は今と違つたんですか？」

「純粋な子供だったと思う。だが、私の手は汚れてしまったから」
「……」

瞬は言葉に詰まつて、アフロディーテの横顔を見る。

初めて会つたときから思っているが、八十八星座の中でも随一の美貌の持ち主といわれる彼は、改めて見ると本当に、美しい青年だった。

だがどこかに憂いを秘めているようなその表情に、瞬は無意識に、

やはり小宇宙を通してさまざまなことを読み取ろうとしてしまう。

「君はただの憑依体質に加えて、そんな恐ろしい力を秘めている。

私は君を守ろう。それはアテナに頼まれ聖域を守護する者としてもそうだが、

私自身が君を守りたいと、そう思う。私のように、汚れた大人にならないうちに」

「アフロディーテ……」

瞬は悲しそうに、アフロディーテの顔を覗き込んだ。

「何でそんなこと言うんですか……？」

そんなこと言わないで下さい、アフロディーテは汚れてなんかいません。

私、あなたのことまだよく解らないけど……優しい人じゃないですか。

子供たちにあんなに優しい目をするじゃないですか」

瞬の言葉は切実だった。アフロディーテはしばらく瞬を見つめていたが、ふと笑う。

「君は私のような相手に対しても、そんな風に言える子なんだな」

アフロディーテは瞬の頭をそつと撫でた。瞬はどきりと体を強張らせる。

「私は優しくなんかない。だが君は優しい子だな。

君のような心を私は失ってしまった。

君のいるうちに、いつか話そう。アイオロスが死んだ日のことを」アフロディーテの言った言葉に、瞬は息を飲み込む。

そして思い出すのだった。アイオロスがサガの乱によって命を落としたあと、アフロディーテは前教皇を暗殺したのがサガだと知りながら、教皇の座についた彼に仕えたのだ。

それゆえに十三年後、瞬と出会い、拳を交えることになる……。

瞬はそこから先を今聞きたかった。が、アフロディーテは立ち上がり、言った。

「遅くなつたな。送っていく。もう休め」

「はい……」

せっかく温まったのに、また出るのは勿体無いな、とアフロディテは言った。

ごめんなさいと瞬は呟いた。

謝るな、とアフロディテは言った。

第八部

翌朝黄金聖闘士は緊急招集をかけられ、アテナの元で、不穏な小宇宙の干渉があるという報告を受けた。

事態はまだ本格的ではないが、一般市民にも少なからず影響が始めている。アテナは、各聖闘士に、それぞれ軽くではあったが、一日だけ特別任務を授けた。アテナが感じた不穏な小宇宙の生じる地点へ赴き、その周辺の市民の様子を見ることが、憑依体質の市民があれば、保護を施すこと。

それぞれ各黄金聖闘士が自宮に戻り、任務に付く準備を始めた。アフロディーテは瞬を連れ立って、昨日自分が制した少女の元へと赴いた。

聖域監視下の病院で、少女は眠っていた。まだ瞬と大して歳の変わらない、齡十二、三ほどの少女だった。

「一応昨日も保護の術はかけたが。念のためだ」

アフロディーテはそう言って、眠る少女の額に手をかざし、少女の精神が他者に乗っ取られることの無いよう、自身の小宇宙で保護をかけた。

瞬は、その様子をじっと見守る。

少女はそっと、目を覚ました。

「…聖闘士さま」

少女はぼんやりとした目で、アフロディーテを見上げる。大丈夫、とアフロディーテは少女の額に手を当てた。

「昨日は済まなかった。君を止めるだけのつもりが、手傷を負わせ

てしまった」

「いえ…もうどうか謝らないで下さい。何度も昨日謝って下さったではありませんか」

少女は力なく目で笑った。

「私、意識だけは少し残っておりまして。なのに、自分では考えられないような大きな力が出て、嫌なのに、聖闘士さまを殺そうとしてしまった」

「意外に意志が強いのだな。素人があれだけの憑依を受けて、自分の意志が残っているとは、大したものだぞ。だがもう大丈夫。君はもう誰にも魂を攫われることはない」

アフロディーテの施した、白い薔薇色の小宇宙に包まれているのを感じて、少女は安心したように静かに呼吸した。

「こういうことは、前からあったのか」

「…はい。私は占いの師の娘で、親元で占いの修行をしている身です。占いの修行には必要だろうと、幼い頃から何度か、霊媒の修行もしていました。未熟ゆえ、降ろそうとした霊ではなく、狐憑きの状態になったことが幾度かあります」

「なるほど」

アフロディーテは静かに得心したが、瞬は、少女の言葉に息を飲んだ。

親に言われて、自分から降霊するなんて……と、瞬は少女の危険な生い立ちを聞いて、複雑に胸を悩ませた。

「降霊はしばらくやらないほうがいい。退院して静養をしたのち、それでも占いの勉強を続けたいなら、まず聖域の監視下にある祈祷所を訪れよ。そこで、正しい瞑想の訓練を覚えてからにするといい」

「…はい。わかりました」

少女は素直に返事をした。アフロディーテは一輪薔薇を生じさせた。

「また様子を見に来る。ではな」

アフロディーテは少女の髪にその薔薇を挿して、退室した。

少女は頬を赤らめて、アフロディーテの背を目で追った。瞬はそんな少女の様子を見て、ぺこりと一礼して自分も退室した。

薔薇を置いて立ち去る気障な姿が似合う人なんて、そうそういない、と瞬は、必死に彼の歩調に合わせて歩きながら思った。

よく見ると本当に素敵な人だ……と瞬は、アフロディーテを見上げる。

街に出るたびアフロディーテは目立った。道行く女性たちの、誰もが振り返る。

見とれているとまた歩幅を離された。瞬は慌てて後を追う。

アフロディーテは歩くのが早かった。少しでも瞬が気を緩めると、すたすたとどんどん先に行ってしまう。

瞬は隣にしようと思ったら、駆け出すくらいでないと追いつかなかった。追いついては置いていかれ、追いついては置いていかれを繰り返す。

「ああ。悪かった。私としたことが」

ふと気付いたように、アフロディーテは立ち止まる。

「いつも君は後ろからついてくるからな。今日は何故そんなに慌てて走っているのかと思ったが、悪かった」

アフロディーテはす、と左手を差し出す。不思議そうな顔をして、瞬が一向に気付く気配がないので、気の短いアフロディーテは瞬の右手にその差し出した手を滑り込ませた。

「ちょっと……！」

「済まなかった。私も歩調を合わせるよ」

そう言いながら、アフロディーテは瞬の手を引いて、またどんどん歩き出す。心なしか、歩調だけは緩めて。

「あの、袖！袖でいいです、袖につかまらせて下さい」

慌てふためく瞬にはお構いなしに、アフロディーテは瞬の手を握ったまま離さない。

「袖……！」

「日本人は本当にシャイだな。スキンシップを嫌う人種とは聞いていたが、この程度もカルチャーショックになるのか？」

「……」

何だ。ただの西洋人の感覚でそうしただけか。瞬は少し残念そうに、溜息をついた。

「宿敵の私と手をつなぐのは嫌か」

ふとアフロディーテは前を向いたまま言った。瞬は思わず顔を上げる。

「宿敵だなんて、そんな……過去のことです」

「だが私を許せはしないだろう」

「許すとか……許さないとか、そんな」

瞬の心には元より、そんな思いはなかった。ただ拘泥がお互いの間に壁のように残っているのみで、心優しい瞬は、そういう次元での回答を求めていなかった。

瞬が望んでいるのは、アフロディーテとのこの因縁の壁を越えて、解消したいという気持ちだけだった。言葉ではうまく説明出来なくても。

言葉にならない瞬の思いはほのかに掌を伝って、漠然とアフロディーテの元へ小宇宙の波動として届く。もどかしい、それだけでも誰とでも平和になりたい。そんな瞬の純粋な思いは、かつて自分が昔はそうで、だが十二宮の内乱のうちに揉まれながら、いつしか自分とは失ってしまった輝きと同じだった。

この子と同じくらいだった頃の、自分の手は汚れてしまった。

アイオロスが死んだ日に。仮面の下にサガの顔を見たあの夜に。

「私を憎んでいいんだぞ。君は」

「……」

瞬はそっと、アフロディーテの掌を握る手を、初めてぎゅっと握

り返した。

「憎んでなんか、いません。憎みもしません」

瞬の力を手に感じて、アフロディーテは初めて静かな衝撃を感じた。この子の方から一瞬でも、自分を受け入れてくれるとは。

アフロディーテは瞬に向き直って微笑んだ。

「君はいい子なんだな」

「え……」

言われて瞬は顔を赤らめた。素直な子だと、アフロディーテは思った。

瞬は複雑な思いの中、それでもこの手を離したくなかった。

アフロディーテはゆっくりと歩いた。

それが瞬には少し嬉しかった。戸惑いの中で、少しでもこの時間が続けばいいと、少しばかり後ろめたさと共に、師匠との記憶を思い出しながら。

デスマスクは偵察に赴いた先で見つけた、冥闘士の残党兵を片付けて、辺りを見渡した。

始末した死体はざっと三十体。

が、明らかに怪しげな儀式の準備を進めていた痕跡がある。死体の中には巫女も居た。

「……………」

大地に描かれた魔方阵を見て、デスマスクは顔を顰める。

——無差別に神を召喚しようとしていたな。

魔方阵のシンボルには、様々な神の召喚を試みた、象徴がいくつも描かれていた。

おそらく失敗するたびに、召喚する神を変えて、何度も儀式を行ったとみられる。

「こんな無節操に呼んだところで来るわけねえだろ……」

デスマスクは呟いた。自分も無節操な男だと自認しているが、こ
と信仰となるとさすがに彼も呆れることしかできなかった。ハーデ
ス信仰の冥闘士が、他の神を次々に召喚しようとしていた様子を思
い描くと、敵ながら胸糞の悪さを感じた。

見渡すと、召喚が成功しそうだったのか、同じ象徴を呼ぼうとし
た魔方阵が、あたりにはいくつも描かれていることに気づく。

「これは……」

その金星のシンボルを見て、デスマスクは一柱の神を思い当てる。

「……まさか。女神アフロディーテを……？」

デスマスクは立ち上がって顔を上げた。

そして、一番近くにある女神アフロディーテ所縁の神殿遺跡へと、
走り出した。

第九部

聖域に戻ると、候補生たちが騒いでいた。

アフロディーテと瞬はただならぬ様子を見て、何かあったのだと思った。

「どうした？」

白銀聖闘士の一人を捕まえ、アフロディーテが訊く。

「たった今、政府から戒厳令が出たんです。」

ニュース番組で、一連のテロ事件は聖闘士の仕業だったと報道され、市民も混乱して詰め掛けています」

「何……」

アフロディーテは眉を顰めた。そこへ、混乱する候補生たちを、別の白銀聖闘士が大声で取り纏めた。

「静粛に！これは聖闘士の仕業ではなく、冥闘士の残党兵によるもの。」

詳らかな話は黄金聖闘士より追って報告がある。全員待機！」

候補生たちはどよめきながら、指示に従う。白羊宮から出てきたムウがアフロディーテに歩み寄り、小声で言った。

「緊急招集です。聖域に残っている黄金聖闘士は全員、ただちに謁見の間へとのこと。」

偵察から帰還したデスマスクからの、重大な報告もあるようです」

「解った。向かおう」

不安そうに見上げる瞬を振り返り、アフロディーテは言った。

「すぐ戻る」

「はい……行ってらっしゃい」

瞬は少し不安そうに、アフロディーテの背中を見送った。

「女神アフロディーテの召喚儀式…？」

デスマスクの報告を受けて、アテナは目を見張る。謁見の間でアテナに傳っていた他の黄金聖闘士たちも、驚いて息を飲んだ。

「女神アフロディーテは、先々代のアテナによって封印されています。だから偵察後、女神アフロディーテの神殿もいくつか調べてきましたよ。一応封印はまだ有効のようです。が、一箇所封印が解かれている神殿がありました。」

もちろんどこにも、召喚儀式の形跡がありませんたよ」

「……………」

「アテナ。提案なんです、冥闘士が召喚しようとしているのは、女神アフロディーテだと目星をつけて、これから偵察した方がいいんじゃないですかね。四百年も経っていれば、そろそろ封印も切れる頃です。」

儀式の魔方阵は無節操でした。あらゆる神を召喚しようとした形跡があり、一番召喚に成功しそうだったのが女神アフロディーテだったと見受けられます。

女神アフロディーテは愛と豊穡の神とされていますが、同時に、死と破壊の神でもあり、冥府につながりもある。神々の愛人だということもあって、アテナとは神話より折り合いが悪い。

あんな無節操な召喚を行う連中です。最終的に冥神ハーデスにアテナの首を捧げられるなら、神様なんか誰だっていいでしょう」

「デスマスク、口の聞き方に気をつけよ！」

シユラが立って怒鳴る。アテナは良いのです、とシユラを制した。

「デスマスク。よく解りました。今回のあなたの功績を認めます」

「それと。戒厳令が出て、下がひどく混乱してますが」

「市民や候補生たちの不安を煽らないよう、これまで公にはしてきませんでした、一連のテロが聖闘士の仕業だと誤報された以上、聖域はすべてを明示しなければなりません。」

今まではあなたがた黄金聖闘士に任せるだけの規模で済んでいたが、こうなればもはや限界でしょう。

聖域は地上の平和のためにあるということを、私はこれから声明を出します。

この中から二人に、私の護衛を命じます。残った者は聖域全体、および市民にこのことを説明し、警備に当たりなさい」

「はっ」

黄金聖闘士は一様に頭を垂れた。

アテナは立ち上がった。

アテナはただちに声明を出した。その日一日聖域は混乱した。

瞬は街へ出ようとしたが、戒厳令が敷かれた以上、黄金以外の聖闘士は、聖域から出ることは今日はできなかった。

他の黄金たちとともに、市民の混乱を収束させるために出て行ったアフロディーテを待つ間、瞬は人だかりのできている男子候補生の寮に紛れ込み、寮のテレビで報道を聞くことにした。

生放送でアテナの声明が流れ終わると、番組は今までのニュースをただ繰り返しばかりになった。コメンテーターの推論合戦だけが飛び交いだした頃、もう新しい情報は得られそうにない、と感じて瞬は寮を抜け出した。

「おい」

寮を出ると、瞬は五、六人の候補生たちに取り囲まれた。中には白銀聖闘士もいる。

「え……」

驚いて瞬は見上げるが、自分より年上らしき体の大きな聖闘士たちは、にやにやと笑いながら、瞬に寄ってくる。

「女はサントリーニ島に行ったんじゃないのか。それとも恋し

「くたつて戻つてきたか」

「え、あの…」

そのとき瞬は、彼らが一種おかしな変容状態であることに気がついていた。

「正気じゃない。何者かに小宇宙を干渉されている。」

「男たちは瞬を取り押さえ、体を弄つた。」

「…！」

瞬はひつと声を上げた。うろたえてもがくが、男たちは瞬を押さえ付けたまま、どこかに連れて行くとする。

「体を触られるのがこんなに気持ち悪くて、おぞましいことだと知らなかった瞬は、悲鳴を上げて逃げようとする。」

「やめて…！」

「女子がいなくなつて溜まつてんだよ。今夜はまた仲良くしよう」
必死に抵抗するが、瞬は服を乱され、その中にまで手を入れられる。

「今まで感じたこともない恐怖に、ぞつとして瞬は叫んだ。」

「いや…離して！」

「男たちの顔が近づく。瞬は叫んだ。」

「助けて…アフロディーテ、助けて…！」

ふと、男たちの強い力が抜け、瞬の胸に一人の男の頭が重く圧し掛かる。

「何をしている！」

はつとして瞬は顔を上げた。アフロディーテとアイオリアが恐ろしい形相で駆け付けてくる。ふと見ると、瞬を襲った男たちの体には、薔薇が突き立てられていた。

「アフロディーテ…！」

瞬を助け出し、アフロディーテはその背に匿った。アイオリアは薔薇で動きを制されている男たちをまとめてのして、怒鳴る。

「貴様ら！」

アイオリアは縛り上げた男たちを殴りつけた。

「アフロディーテ、ここは任せろ。瞬を保護しろ」

「……解った」

アフロディーテは震え上がっている瞬の肩を押し、双魚宮まで連れて行った。

双魚宮の生活区に着いても、瞬の震えは止まらなかった。

「大丈夫か」

アフロディーテが隣に跪き、暖炉の火に当たらせている瞬にそつと訊いた。

瞬はぼろぼろと涙を流し、やがて激しい嗚咽にむせながら泣き始めた。

「怖かったな。もう大丈夫だ」

声をかけると、次第に瞬はわんわん泣き出した。アフロディーテは号泣する瞬を抱き寄せて、頭を撫でた。

「怖い……怖い……！」

瞬は泣き続けた。

気の済むまで瞬を泣かせ、その間アフロディーテはずっと大丈夫だ、大丈夫だと繰り返し、抱き寄せたまま瞬の背中を摩つてやった。やがて瞬の涙が止み、しゃくりあげる嗚咽だけに落ち着いた頃、アフロディーテは温かい茶を淹れて、瞬に飲ませた。

体を触られたことは同じなのに、アフロディーテが背中を摩ったり頭を撫でてくれるのは、引き裂かれるような恐怖を少しだけ和らげてくれた。

瞬が落ち着くと、アフロディーテはぽんぽんと瞬の肩を叩いて言った。

「私も子供の頃、同じ目に遭ったことがある。怖かった。そのとき母が、こうしてくれた」

アフロディーテに齧り付いたまま、瞬は驚いて、顔を見上げる。ぐしゃぐしゃになった瞬の顔を見て、アフロディーテは涙を拭ってやった。

男の人なのにと瞬は不思議そうに訊く。

「子供の頃はよく女に間違えられてね。それでもよくこんな目に遭った。」

まだ家族がいた頃のことだ。ずっと昔。とても小さい頃の話だ「アフロディーテはそれから瞬の気の済むまで、そばに居てやった。今日はここに泊まれ。帰ってくる時、君が止まっている宿を確認してきたが、戒厳令で閉められていた。黄金は今晚みな夜警に当たるから、安心して眠るといい」

そう言ってアフロディーテは瞬を立たせた。

暗い寝室に瞬を横たえて、アフロディーテは出て行こうとした。

瞬は思わず、その手を掴んだ。

「行かないで下さい……怖い」

瞬の顔は恐怖に染まっていた。一人にされることを恐れていた。

アフロディーテは仕方なく、瞬のそばに付き添った。

瞬は一向に寝付かなかった。布団の中でもまだぶるぶると震え、アフロディーテの手を離そうとしなかった。

アフロディーテはしっかりと瞬の手を握ってやった。

かつて母が自分にそうしてくれたように。

眠りそうにないな……と思ったアフロディーテは、そつと瞬の頬に手を翳した。

「毒のない香気だ。安らかな眠りだけを君に与える。安心して眠れ」

「え……待って、駄目です」

瞬は抵抗しようとしたが、強い香気に包まれ、ことりと眠りに落ちていった。

瞬が寝息を立て始めた。アフロディーテはしばし、その顔を見つめる。

香気によって夢でも見るように、だがそれでも恐怖に顔を歪ませ

ている瞬は、眠っていると本当に、小さな少女だった。

怖かっただろう。この子に怖い思いをさせてしまった。

戦場で感じる恐怖とは違う、女にしか解らない永遠の恐怖を。

瞬のように純粹で、汚れを知らない少女には、ひどく深い傷として胸に刻まれてしまっただろう。

アフロディーテは眠る瞬を見届けて、音を立てないようにそっと部屋を出た。

第十部

アフロディーテはアテナに謁見を申し立て、先ほど起こったことと、瞬の様子を伝えた。

「そうですか……」

高潔な神であるアテナは、報告を受けて表情を歪ませた。

「申し訳ありません。私の不手際で、このようなことに」

「いいえ。あなたのせいではないのです、アフロディーテ。

混乱を第一に収めるため、黄金聖闘士をほとんど出払わせてしまった私がいけないのです。あなたを瞬の元に残して居れば、こんなことには」

「……………」

「アフロディーテ。あなたにお願いしたいことがあります。

明日から双魚宮で瞬を見てくれませんか。用意していた瞬の宿が、戒厳令を受けて臨時閉館してしまったのです。もちろん他の宿泊施設にも問い合わせましたが、今はまだ市民の間で情報が錯綜していて、どこも聖域からの要望は、受け入れてくれそうになく……それに、このようなことが起きた以上、なるべく一緒に居てやってほしいのです。出来るだけ早く、瞬の滞在場所を用意するように尽力はしますから」

「……アテナはそれでよろしいのですか。私は男ですが」

「……あなたを信頼しています。傷ついた瞬を、あなたはしっかり慰めました。この状況で、他に女の戦士が居ない聖域で今、このようなことを頼むとしたら、あなたしか……それに」

アテナは言いにくそうに口ごもる。

アフロディーテはアテナの言わんとすることを察した。

「アテナの命令なら、私はそれに従います。たとえ現在の任を解かれても。」

残党兵が召喚しようとしているのが、女神アフロディーテだからですね」

「…はい」

「構いません。同じ星である私が調査に関われば、少なからず影響が出るでしょう。召喚儀式を成功させることになっては取り返しがつきません」

「勿論最終的な神殿調査には、あなたも加えるつもりでいますよ。ただ今は、封印の維持を優先したいのです。」

「今は、なるべく、瞬のそばに居てくれますか」
「御意」

「ありがとう、アフロディーテ」

この名前で呼ばれることは、正直あまり好きではなかった。

翌日、薔薇の手入れを済ませたあと、瞬が目を覚ます前に、アフロディーテはそばについて、瞬が目を覚ますのを見守った。

はっと覚醒した瞬は、夕べと同じように、そばにアフロディーテが居るのに気付き、驚いて起き上がる。

「…ずっといてくれたんですか？」

「いや。だが、起きて一人だと、不安だろうと思って」

アフロディーテの気遣いに、瞬は気恥ずかしさの中、同時に胸が温かくなるのを感じた。

昨日の事件でまだ恐怖を感じている瞬は、その気遣いがたまらなく嬉しかった。

この人は何て優しい人だろう。

本当に何故、かつてはこの人と殺し合わねばなかったのだろう…。

「今日からしばらく、一緒に居られるぞ」

「え？」

「アテナが、なるべく君と一緒に居るようにと言って下さった。これゆつくり話せるな」

そう言われて、瞬は、自分が何のためにここに来たのか思い出す。この人と解り合いたくて、この人を知りたくてここへ自分は来たのだ。

どうして、という思いはきつと、言葉を重ね続けることによって、今後解消できる気がした。

ダイダロスのことは勿論まだ胸に痞えている。

だが、アフロディーテの優しさに触れるうち、瞬は、次第に彼に対して心を開き始めていた。

戒厳令が敷かれて街は一時的に閉鎖され、特例である聖闘士を除き、市民は外出を禁じられた。

街は静かだった。

アフロディーテは、アテナに献上しなければならないものがある、と言って、街の小さな一軒の店に入った。

もちろん店は閉まっていたが、裏口からアフロディーテは入っていった。

中に入ると、表向きは服飾品や雑貨を取り扱う店のようだった。

店主にアフロディーテは小声で話をつける。

店主はそつと店の奥に入り、用意してあった小箱を取り出してきた。

その辺の商品でも眺めて来い、とアフロディーテは瞬に促し、店主とその小箱の中身について話し込み始めた。

手持ち無沙汰になった瞬は、別段興味もなかったが、店内の服飾品や雑貨を見て回った。

どれも高級そうな婦人服ばかりだ。雑貨も値札を見ると、とても手が出せそうにない値段だった。私にはこんな服を着たり、飾りを付けたりする機会はないのだろうなあ、と瞬は、漠然と思っていた。「一部傷物なのが惜しいな」

「すみません。今のところこれだけしか用意できなかったもので」店主が申し訳なさそうに頭を掻いている。アフロディーテは小箱の中身を品定めしている。どうやら聖水を入れる小瓶らしい。聖域ではときに、清めた水だけではなく、アテナや聖闘士の血を入れるために使用されるものだ。

「しかし、言われたとおりの古代神殿で発見された、聖別された代物です。品の良さは聖闘士さまにもお解りいただけるでしょう」

「確かに品は良い。ただこの瓶だけは別の物に換えてもらいたい」アフロディーテは一瓶、傷物の品を掴み上げた。透明なクリスタルグラスの中央に、何か紋章が記されている。

「これは駄目だな。女神アフロディーテのシンボルが刻まれているアテナに献上するわけにはいかない」

瞬はそれを耳にして、店主とアフロディーテの方を見遣る。店主は畏まりました、と言って、後日違う物を取り寄せますと言っていた。

会話を聞いていて不思議に思った瞬は、アフロディーテに尋ねた。

「何で駄目なんですか？」

「傷物だからだ」

「そうじゃなくて……女神アフロディーテも、ギリシアの神様ですよね？」

「女神アフロディーテの所縁の物を、アテナに献上するわけにはいかない」

そしてまた店主とアフロディーテが話し始めたので、瞬は首を傾げながら話が終わるのを待った。

ふたたび店の裏口から出て、二人は街の通りへと歩き出した。
別段アフロディーテの方からは何も言わなかった。

沈黙に耐えかねて、瞬は何か話題を探そうと忙しなく心を巡らせた。

「あの……何で女神アフロディーテの所縁の物を、アテナに献上したらいけないんですか？」

「君はアテナの聖闘士なのに、ギリシア神話も読んだことがないのか？」

「……ええと。孤児院やアンドロメダ島で、本は読まされたことがあります」

「まあその程度か。それなら、神話の詳細など知らなくても仕方ないな。今日本を貸してやるから読むといい」

「はあ……」

「アテナは純潔の神だからな。神々の愛人であるアフロディーテの神殿から出土した献上物など、礼を失するから差し出すわけにはいかないんだ。こと私からなどな」

「え？」

瞬はアフロディーテを見上げる。そして訊いた。

「アフロディーテから献上できないっていうのは、女神アフロディーテと名前が一緒だからですか？偶然なのにな？」

「偶然なわけがなからう。今の私の名は、聖闘士になってから貰った名前だ。デスマスクやシュラだってそうだ」

そうだったんですか！？と瞬は、ひどく驚いた。呆れたようにアフロディーテは瞬に言う。

「北欧地方にアフロディーテなんて名前をつける風習は無い。イタリアにもデスマスクなどという名前があるわけがなからう」

「でも……じゃあ、何で、聖闘士になってアフロディーテはその名前？」

「ギリシア神話の女神アフロディーテの逸話で、怪獣テュフォンに襲われた時、女神アフロディーテは息子と魚に姿を変えて、川に逃げ込んだというのがある。それが魚座となった。私は魚座の聖闘士だから、女神アフロディーテの名前を冠されただけだ」

「そんな……知らなかった」

「勉強も見てやらないといけならしいな」

アフロディーテは嘆息するが、心なしか教育することが増えて嬉しい様子でもあった。

瞬はそれ以前に、ただ一つのことを気にかかる。

「じゃあ、アフロディーテの本当の名前は、何て言うんですか？」

「さあな。忘れたよ」

今となつては本当に何の名残も拘泥も無いかのように、あっさりとアフロディーテは吐き捨てた。

瞬は、それでも知りたかった。

「私には、教えてくだらないんですか？」

わざとそんな風に言ってみる。するとアフロディーテは、瞬を振り返った。

「知りたいのか？」

「はい」

瞬は素直に返事する。

アフロディーテは、首にかけていたプラチナのネックレスを取り出した。鎖の先には、銀の指輪が付いている。

アフロディーテは瞬に、その指輪に刻まれた文字を見せた。

それは読めない外国語だった。

「これは？」

「母の形見だ。ここに書いてあるのが私の名前だ」

言われて瞬は上気し、もう一度指輪を顔に近づけて、読めない文字をじつと見る。

「……どこの国の言葉なんですか？」

「アイスランド語だ」

「アイスランド語で、なんて書いて――」

「アイスランド語だけは教えない。自分で勉強でもするんだな」
からかうように笑いながら、アフロディーテは言った。

第十一部

双魚宮に戻って、瞬は分厚いギリシア神話の本を渡され、それと格闘させられる羽目になった。

瞬はギリシア語は話せても、読むにはまだ慣れていない。日常に蔓延する標識やバスの運行表示など、その程度なら理解できるが、ことこんな古ぼけた刊行の古い書物は印字も古く、神話のせいか解らない単語がたくさん出てきて閉口した。

そもそもそういえば、孤児院やアンドロメダ島で読まされたギリシア神話は子供向けで、有名な話しか載っていなかった。

それで何か変なことを感じて、読むのを挫折した記憶がある。たしか最高神ゼウスが、やたら妻がたくさん居て、どうして奥さん一人だけではないのだろう、と不思議に思ったものだ。

魚座伝説の部分を読んでみたが、瞬には昼間アフロディーテが話してくれた程度のことでしか解らなかった。

着替えとアテナへの報告を済ませたアフロディーテが戻ってきて、瞬が頭を抱えて書物と奮闘している様子を見て、可笑しそうに笑った。

「アフロディーテ。これどういう意味の単語ですか？」

瞬は、自分がギリシア語の読みはまだ得意でないことを説明して、アフロディーテに書物の一行を指し示す。

アフロディーテは瞬の隣に手を付いて、瞬が示した部分を目で追った。

示された文字を見て、眉を顰める。

『娼婦神殿』という単語だった。

昨日のことがあって、そういった単語を今の瞬に告げるのは、アフロディーテは躊躇われた。

「あの…？」

「『娼婦神殿』だ」

仕方なしにアフロディーテは答えるが、瞬はきよとした顔をしている。

「娼婦神殿？」

まさかこの子は娼婦の意味を知らないのか、と思った。

予感的中する。「娼婦神殿ってどんな神殿ですか？」と真顔で尋ねる瞬に、少々アフロディーテは面食らう。

仕方ないので、先に神話的意味合いを教えることにした。

「ギリシア神話に限らず、愛と豊穡を司る女神の神殿は、五世紀ごろそういう風習を持った神殿として機能していたことが多い。

初めての戦場へ向かう戦士が神殿を訪れて、自分が気に入った巫女の前に硬貨を置くんだ。

そして一夜をその巫女と共にして、次の日戦場へ赴く。

それが娼婦神殿だ」

「巫女さんが、戦場へ赴く戦士のために、不安を夜通し聞いてあげてくれるんですね」

愛の女神の神殿らしい、優しい風習だ、と瞬は笑う。違う、とアフロディーテは額に手を当て否定する。

「中にはそういう戦士も居たかも知れないが……実際はそうじゃない。

戦場で男は死んでいくからだ。女は戦士の遺伝子を、後世に残さなければならぬ。それが次代の戦乱を支える。

君、そもそも子供が何で出来るのか、知識はあるのか」

「子供……それは、女の人が赤ちゃんを産むように出来ているからですね」

「女だけでは子供は産めない」

「それはそうですよ。結婚したら、自然に出来てくるものでしょう。神様が授けてくださるんですから」

「……」

参った。この子はサンタクロースの存在を信じるかのように、コ

ウノトリが子供を運んでくると思っている。

女神アフロディーテは心優しい神様だったんですね、まるで今のアテナみたいじゃないですか、と、瞬は満足に読めない本を前に感心している。

「娼婦って優しい女の人のことなんですね。これから私も娼婦になります」

瞬が無邪気に言うのを訊いて、アフロディーテは書物を取り上げた。淑女の意味合いと本気で取り違えている。

「君にはまだ早かった。ギリシア神話はしばらく読まなくていい」「えっ、どうしてですか」

アフロディーテは書物を本棚に戻す。もっと女神アフロディーテのことを知りたいです、と言う瞬の言葉には、もう耳も貸さなかった。

そもそも最高神ゼウスがデスマスク並みの好色なのだ。今の瞬には読ませない方が良くと思った。

「娼婦は優しい女の人のことではない。間違っても金輪際、君は『娼婦』という言葉を口にするな。間違ってもだ」

「…？」

「絶対に口にしないと誓え。約束だ」

「はい。…？」

瞬は腑に落ちない顔をして首を傾げている。アフロディーテは背中を溜息を付いた。

自分がそういう知識を得たのはいつのことだっただろう。聖域に来て、デスマスクがあんな調子だから、助平な武勇伝は嫌と言うほど聞かされた。それでもその頃には知っていた気がする。まだアイオロスが生きていた、ただアテナと正義のためだけに自分は生きる身なのだと、純粋なまでに信じていたあの幼い時代にも。

今まで抱いた女の中には、処女も何人が居た。が、瞬はアフロディーテが今までに会ったことのないくらい、初心な子供だった。

そんなことがあったため、どうしようか迷ったが、結局入れないのも可哀相だと思い、焚き付けたあとアフロディーテは瞬に、風呂に入れ、と言った。びっくりして瞬は顔を真っ赤にさせたが、「私は気にしないから。君も気にせず使え」と言っ、瞬を促した。

「あ……じゃ、じゃあ、…頂きます……」

相当躊躇っていたが、瞬は最後にそう言っ、火の吹き出るような顔をして恥ずかしそうに立っ、いった。

瞬が浴室へ消えたあと、しばらく経っ、デスマスク本人が双魚宮を訪れる気配がした。アテナへの報告が終わったのか、デスマスクは、二人の居る生活区へ訪問してきた。

「よう」

偵察のことで何か話しにきたのだと悟った。

「おかえり」

アフロディーテはデスマスクにテーブルの椅子を勧めた。

「神殿を四つほど調査した。どこにも冥闘士が居たよ。もちろん、女神アフロディーテの召喚儀式ばかりやってた。決まりだな」

「……。封印は？」

「一箇所解かれていた。だが地上に出てこないところを見ると、おそらく、女神アフロディーテはギリシア各地の所縁の神殿をまたいで、いくつか封印を重ねてかけられているんだろ」

「そうか。…ならいい。一度にいくつか封印を解かれない限り、不安はないのだな」

「良かねえよ。他の黄金の報告も合わせて、これまで三つの神殿の封印が解かれてる。七つも解かれれば、危ないと思うぜ」

「…………その程度で封印は解けてしまうのか」

「俺の読みではな。四百年前の封印なんてその程度で破れるさ」
デスマスクは鼻を鳴らした。

デスマスクにはおかしい勘があった。この手の勘は外したことがない。

アフロディーテは憮然とする。

「任を解かれたんだってな。アテナに言われたか。お前がいると、調査に弊害が出ると」

「ああ。当然の判断だ。間違いが起こって召喚が成功したらいいいな」

「だが実際現れたらどんないい女なんだろうな、女神アフロディーテは。」

美と愛の麗しい女神。ひと目拝んでみたいもんだ。

恋多き女神が地上に降り立てば、毎晩女を抱いても飽きない気がする」

「…デスマスク。聖域を守護する黄金聖闘士がそんなことを言うものではない」

アフロディーテは眉を吊り上げた。

そこへ、風呂から上がった瞬が出てきた。デスマスクの姿を見て一瞬気まずそうな顔をしたが、「おかえりなさい」と困ったような顔で笑った。

デスマスクは口笛を吹いた。

「何で瞬がお前のところで風呂に入ってるんだ？」

デスマスクはイタリア語で訊いてきた。瞬に聞かれても意味が解らないように、デスマスクはわざと、母国語で言ったのだ。

アフロディーテは説明したくはなかったが、瞬が昨日どんな目に遭ったか、そのためにアテナがこの状況でどんな苦渋の判断を下したか答え、そしてきつい口調で言った。

「口笛など吹くな。瞬が気付いたらどうする。昨日は本当にひどく泣いたんだ」

瞬は二人が、なぜ外国語で話しているのか不思議そうな顔をした。デスマスクはにやにや笑いながら言う。

「これは邪魔したな。今夜は優しくしてやれよ。間違いなく初めて

だろうから。

上辺では生真面目そうなこと抜かしといて、やっぱりお前はいつも抜かりがないな』

『デスマスク!』

アフロディーテは立ち上がって、デスマスクの胸倉を掴んだ。

瞬は驚いて、慌てて二人の間に仲裁に入る。

「あ、あの…! 喧嘩はやめて下さい!」

『冗談でも今はそういうことを言わないでくれ。この子はまだ子供なんだ』

知らない外国語で怒るアフロディーテを見て、瞬はただうろたえる。

デスマスクはアフロディーテの手を掴んで離すと、わかった、わかったと笑った。

『今日はこれで帰るから勘弁しろよ。』

ところでお前、この象徴が何を表すのか、知ってるか?』

デスマスクは自室で走り書きをしたと思われるメモ用紙をポケットから取り出して、アフロディーテに渡した。

そこには何らかの星のシンボルと思われる、徴がペンで描かれていた。

『何だこれは』

『お前も解らないか。今までの魔方陣に必ず描かれている象徴なんだが、こんな星は見たことがなくてな』

アフロディーテはもう一度メモを見る。見たことはない。

『冥闘士の暗号ではないのか』

『やっぱりそうかな。星の象徴にしちゃ半端だ。まあ、知らないならいいんだ』

そう言つてデスマスクは、邪魔したな、また来ると言つた。

出て行くとき、

『瞬はお前に本気だよ。大事にしてやりな』

と言が残したので、アフロディーテは眉を吊り上げたまま、扉が

閉まるのを見ていた。

瞬はおずおずとアフロディーテに訊いた。

「あ、あの……何で喧嘩してたんですか。大丈夫ですか？」

アフロディーテは険しい顔のまま、瞬を振り向いて言った。

「済まない。驚かせたな」

「デスマスクとは、仲良しだつて聞いていますが……」

「そうだよ。気にするな。いつものことだ」

「……」

それでも仔犬のように心配そうに見上げている瞬に、アフロディーテはぽんと頭の上に掌を乗せた。

「これは私たちの間では挨拶みたいなものだ。私は短気だね。それをデスマスクが挑発する。これから私たちをよく見ている。しよっちゅう掴み合っているから。始まったら、じゃれ合いがまた始まった、くらいに思ってくればいい」

くしゃくしゃと頭を撫でられて、瞬は恥ずかしそうに上気したが、やっと安心したようだった。撫でられたことが心底嬉しそうだった。

『瞬はお前に本気だよ。大事にしてやりな』

デスマスクの言葉を思い出してアフロディーテは、「冗談だとしても、こんな初心な子に本気になられたら困るな、と、ふと思った。

第十二部

水瓶の中に、少年は封じ込められていた。

黒装束の巫女は、そつと眠る少年に囁きかけた。

「今こそ、泳げ」

水の中で少年は、揺ら揺らと水に抱かれ眠り続ける。

「行って、再び母の手をこれで結うのだ。もう二度と、離れることがないように」

そして巫女は水瓶の中に、神殿の封印解除を進める中でアルレシヤの星から地上に取り出した、少年の手首に結び付けられているのと同じ、破れたりボンの片割れを投げ入れた。

少年は水に溶けた。巫女は妖しく微笑んだ。

「行け。魚の片割れよ。」

そなたを誘い水にすれば、今日この刻に、大きな器が手に入る」

星見をしていたアテナは、星の動きに何か異変を感じ取った。

神はまだ、召喚された動きはない。

だが明らかに、何か動き出した気配がある。

アテナは黄金聖闘士たちに、封印の解かれてしまった神殿を破壊する命を、また、儀式の行われている神殿を見つけ次第、神殿にかけられている召喚の術を解除する任務を与えた。

任を解かれているアフロディーテはただ無表情で、だが胸の内では自分が、任務に携えないことを少々、もどかしく思った。

アフロディーテと瞬が病院の仕事を終えて帰ろうとした時、憑依状態で搬送された子供の様子がおかしいと、看護婦が駆け寄ってきた。

アフロディーテはそれを聞き、瞬にここで待っている、と告げて、その看護婦と一緒にまた、院内の奥へと戻っていった。

瞬は入り口の待合室の椅子に腰掛けた。

入り口から差し込む昼の光は眩しく、院内を明るく照らし出していた。

ふと、人もまばらな待合室に、数人の男たちが慌てふためきながら駆け込んでくる。

「子供が、子供が川で溺れている」

それを聞いて瞬は、思わずその騒ぎを追って、弾かれたように病院を飛び出した。

ここです、と通された病室は空っぽだった。

「男の子、男の子なんです。おかしいことを急に言い出して、笑いながら暴れたり物を壊したりしていたんです」

看護婦がうるたえながらアフロディーテに言った時、不意に大きな物音がして、二人はその音がした方へと駆ける。

病院の中庭の噴水に浸かって、一人の少年が笑い声を上げながら、ばしゃばしゃと水遊びをしていた。

アフロディーテはその少年の元に走り、少年の体を押さえ付けて言った。

「おい！やめろ」

一月の冷たい水から抱き上げた少年が、見覚えのある子供だった

ことに気がつく。

『母様』

少年は噴水の水に浸かりながら、嬉しそうにアフロディーテの頬を両手で覆い、見上げた。

「お前……」

『母様。やっと母様に会える』

少年は水を蹴って、アフロディーテの顔に投げつけた。

『お前がずっと邪魔だった。お前がいなければ、もっと早く母様に会えたのに』

少年の体から、巨大な小宇宙が立ち上った。

アフロディーテがはっとした瞬間、噴水が突然砕け散り、巨大な水柱が噴き上がる。

『お前がいなければ、もっと早く母様に会えた』

少年の小宇宙は噴き上がる水に溶け、無数の巨大な刃となって、アフロディーテの体を貫いた。

橋の上には人ばかりが出来ていた。それを掻き分け、瞬は川の中腹で、見覚えのある少年が溺れているのを見る。

「あの子……！」

母とはぐれて泣いていた、齢九つくらいのあの少年だ。

瞬は咄嗟に川に飛び込み、その少年の元まで泳いだ。

その少年の手を掴んだ時、ぐいと水の中に引き込まれた。

「……！」

あっ、と民衆が川岸で声を上げたときにはもう遅かった。

水の中に引き込まれて瞬は、喉を詰まらせる。

瞬は水から上がるうにも、少年の力とは思えない力で、水中に引き込まれていく。

『母様』

水の中で少年は、もがく瞬を抱きしめた。

『母様。やっと会えた、母様』

そして瞬の右手を掴んで、握り締めていたリボンを、瞬の手首に結いつけた。

瞬の手首に、そのリボンは水の中で染み込んで痣となった。

『ずっと一緒だよ。もうどこにも行かないで、母様……』

少年は瞬の首を絞めながら、水底へと沈んだ。

水の中に引き込まれながら、瞬は恐ろしい力で締め上げられ、最後の呼吸が泡となって口から溢れ出た。

ミロはアイオリアと共に、アテナに命じられた別地点の神殿で、冥闘士の残党を締め上げていた。

爪を数発打ち込んで、のた打ち回って苦しむ冥闘士の一人を縛り上げ、ミロはそれを踏みつけて、顔を近づける。

「ハーデスの残党が。他の神に信仰を受け渡してまで、アテナに齒向かうかよ」

ミロの爪を受けて、命も絶え絶えの残党兵は、ミロを見上げて最後の抵抗を試みる。

「俺たちは残党の中でも異端視されてきた部隊だ。アテナの首を取ってハーデス様に捧げられれば、神様なんか誰でもいいんだよ……」
「それで女神アフロディーテの召喚を企んだってのか。節操の欠片もねえな」

吐き気がする、と、力任せにミロはもう一発爪を打ち込んだ。

悲鳴を上げて冥闘士は悶え苦しむ。

ミロは眼前のアフロディーテ所縁の神殿を見上げ、冥闘士に言った。

「見てろよ。お前たちのそんな無節操な信仰はこの程度のものだと、

その目に焼き付けてから冥府に帰りな」

そう言ってミロは、一撃で神殿を破壊してしまった。

一瞬にして崩壊する古びた神殿は、それまで冥闘士たちとその巫女が今日まで行ってきた、召喚の礎の小宇宙を開放させて、原子の次元でばらばらと粉碎されてゆく。

残党たちの今日までの祈りと小宇宙は、あっという間に水泡へと歸し、天へと立ち消えていった。

ミロは残党に止めを刺した。残党は一声断末魔を上げて、絶命する。

十数体転がる仕留めた残党兵と巫女の死体を前にして、ミロとアイオリアは神殿の消滅した場所と、吹き上がる砂塵を見上げた。

「……この様子だと、どこもこんな調子だろうな」

「ああ。アテナの言うとおり半年前から準備されていたとすると、ギリシアのほとんどのアフロディーテ神殿で、同じことになっているだろうな。神殿だけでなく、所縁の地も調べる必要があるう」

「風潰しに行くしかねえか……」

行くぞ、とミロはアイオリアに言って走り出した。

カノンとカミュは共に、派遣された別の神殿で、冥闘士の残党兵を討ち、神殿を見上げた。

「封印を解こうとした形跡があるな」

神殿には、鎖状にかけられた先々代のアテナの封印を、解こうとして張られた小宇宙がいくつも、幾何学的な流れを作って神殿の側面を伝い続けていた。

「儀式は完了していない。ここの封印はまだ有効だ。この開封の小宇宙の流れだけを消滅させれば良い」

カノンは拳を放ち、一瞬にして開封の小宇宙の流れを分解した。

いくつもの計算式がアストラル次元で干渉を受け、封印の開放へと進んでいた数式は、逆流して収束の方向へと流れ出す。

開封されかかっていた封印を解く流れが、再び封じの形へと戻る瞬間、突然、二人の前に幻影が現れた。

「！」

カノンとカミュは、まばゆい光に目を射抜かれて思わず手を翳す。現れた幻影は、先々代のアテナが鎖状に施した封印を受けた、女神アフロディーテの巨大な幻影だった。

幻影は一頻り光を放つと、封印が元通りに収束すると同時に、少しずつ光を潜めて、やがて掻き消えた。

幻影が消えると、カノンはその方角を見たまま言った。

「これは個だ。全にして個、個にして全。封印された女神アフロディーテの、全体の一部が露見したに過ぎない」

「…封印の残っている神殿はこの方法で維持し、召喚儀式の準備が行われている場所では、破壊しなければならないな」

「ああ。次へ回ろう。時間がない」

カノンは先に立って走り出した。

アフロディーテは突然受けた衝撃から、必死に体を起こした。

砕け散った噴水からは水が吹き上げ続けていたが、少年の姿は忽然と消えて、どこにもない。

聖闘士さま、と看護婦たちが走り寄ってきて、アフロディーテを助け起こしながら言う。

「大変です。川で溺れた子供を助けようと、女の聖闘士さまが」

アフロディーテは驚いて立ち上がった。

あの子供……まさか。

アフロディーテはその瞬間すべてに気付き、駆け出した。

橋の周りの人ばかりを掻き分けて、アフロディーテは目を見張った。

『母様。もうどこにも行かないで。母様』

岸辺に横たわる瞬の手を掻き抱いて、少年が嬉しそうに力の抜け切っている瞬の手首を撫でていた。

「……！」

少年を引き倒し、アフロディーテは瞬の口許に手を翳した。息をしていない。

アフロディーテは瞬に馬乗りになって、心臓を何度も重ねた両手で突いた。水は吐き出さない。

瞬の鼻を塞いで、アフロディーテは口移しで何度も息を吹き込んだ。

やがて瞬ががぼりと大量に水を吐き出した。すべての水を吐かせ、瞬を抱き起こす。

「瞬」

アフロディーテは顔の瞬を揺さぶり、頬を叩く。

「瞬！」

うつすらと瞬の目が開く。

「アフロディーテ……子供が」

色の抜け切った唇が、吐息のようにその言葉を吐き出す。

「子供が……溺れて……」

瞬は右手を彷徨わせた。

アフロディーテは目を見開いた。

瞬の右の手首に、結いつけられたように、契約の刻印が浮かび上がっていた。

祈りを破られて、アテナは目を見開いた。

そして慌てて御簾から姿を現し、傍らに控えさせていた白銀聖闘士と、宮に残らせたムウに言った。

「今すぐ派遣した黄金聖闘士たちを、ここに戻らせなさい」

アテナの言葉に、ムウはただならぬ事態を察して立ち上がった。

「神殿の破壊と偵察を止めさせるのです。今すぐ」

ムウは頷いて、他の聖闘士たちの小宇宙を追って、その場から掻き消えた。

ミロは次に訪れた神殿でも、冥闘士を討って神殿の前に立った。

「めんどくせえ。一氣にやるぞ」

アイオリアと共に神殿に拳を放った時、神殿から女神アフロディテの幻影が現れて、ミロとアイオリアの目を眩ませた。

「……！」

女神アフロディテの個は、ミロとアイオリアの放った拳に射抜かれて、神殿と共に離散する。

突如瞬の体は二つの拳に射抜かれて、アフロディテの腕の中、衝撃を受けて仰け反った。

瞬の体が破け、骨が折れて血が吹き出る。

吹き出した瞬の鮮血を顔面に受け、アフロディテは何が起こっ

たのか解らなかった。が、瞬の体は引き千切られるように何度も仰け反り、そのたびに体が衝撃を受けて破ける。

瞬は大量の血を口から吐くと、とうとう意識を失い、ぐったりと動かなくなった。

アフロディーテは瞬の右の手首を掴む。

そして少年を振り返る。

少年は睫を伏せて、うつとりと左手首に結いつけられているリボンを撫でていた。

すべてを理解したときには、すでに遅すぎた。

血塗れの瞬を掻き抱いて、瞬の血に濡れながら、アフロディーテは小声で瞬の名前を呼ぶ。

「……を向けるな」

アフロディーテは目を見開いて、瞬を抱き抱えながら地面を見つめた。

「神殿に……拳を向けるな……」

そこへムウが、何も無い虚空から突然現れた。

「至急聖域に戻って下さい、アフロディーテ。瞬の肉体を保護します。」

他の黄金聖闘士たちにはこのことを伝え帰還させています」

第十三部

デスマスクはそつと積尸氣を通し、冥府へと姿を消した。

「おい」

自分の庭と称する冥界への入り口で、虚ろな目をして座り込んでいる瞬の姿を見つけて、デスマスクは彼女の腕を掴んで立たせた。

「ここへ来るには早えんだよ。さつさと帰りな」

瞬はそれでも、人形のように全身から力が抜け切っていて、見開いた目は何も映していない。

「しつかりしやがれ。自分が誰なのかくらい思い出せよ」

デスマスクは何度か瞬の頬をはたいた。

「ほら帰んな。道案内なんかしねえぞ。自分で戻るんだ」

ぐったりした瞬の姿は、やがて青白い火に包まれて、この世界から掻き消えてゆく。

片手で担ぎ上げていた瞬の姿が腕の中から消えて、デスマスクは後に残った青白い炎の名残さえも消滅するのを待ってから、巨蟹宮へと戻っていった。

「片道二週間とどこかなあ」

それから十四日が経過した。

瞬は搬送された病院の一室で、ぼんやり意識を取り戻した。

「…瞬」

アフロディーテははつと顔を上げて、瞬の顔を覗き込んだ。

「…」

瞬は定まらぬ焦点で、アフロディーテの輪郭をとらえた。

「解るか、瞬」

アフロディーテは瞬の手に自分の手を重ねる。

重ねた瞬の手首には、赤く刻印が浮かび上がっていた。

瞬の指が、わずかに反応して、重ねられたその手の体温を確かめる。

「アフロディーテ。ごめんなさい。あの子は……無事？」

瞬はぼんやりと記憶を辿り、最初に思い出した少年の安否を問うた。

「無事だ。今アテナの元にいる」

「そう。良かった……」

瞬は眼を閉じて、また深い眠りに引き込まれていった。

アフロディーテはじつと、再び眠りに落ちてゆく瞬を目で追った。やがて瞬の呼吸が規則的に緩やかに聞こえ始めた時、ようやくアフロディーテは椅子に腰を落とした。

「おい。もう休め。気が済んだだろう」

沈黙を破り、アフロディーテの背後で、シユラが言った。
アフロディーテは無言だった。

「まず寝ろ。この二週間、お前が眠った姿を見ていないぞ」

それでもアフロディーテはしばらくそこを動かなかった。

夕日が沈んだ頃瞬の傍らを立ち上がると、アフロディーテはゆっくりと、孤児院への仕事を済ませに病室を出て行った。

シユラは溜息を付いた。

あいつも仕方ない男だ……デスマスクが二週間で目を覚ますと言ったのに、仕事はすべてこなしながら、あとの時間はずつと、この場所で瞬の意識が戻るまでただ待ち続けるなど。

聖域にアフロディーテが戻ってきた頃には、すでに夜の帳が落ちていた。

巨蟹宮を抜けようとしたとき、石段の傍らに胡坐を掻いていたデスマスクが、待ち受けていたように声をかける。

「よう」

アフロディーテは歩みを止めて、デスマスクの方を向いた。

「だから言っただろ。十四日だって」

アフロディーテは何も言わなかった。

アフロディーテはしばらくデスマスクと目を合わせていたが、ふと視線を外した。

デスマスクは デスマスクは胡坐を解いて石段から飛び降り、アフロディーテの前に立った。

「腹は決まったか」

「……………」

「俺はいつでもいいぜ。出る時は声かけな」

デスマスクはにやりと笑い、巨蟹宮へと戻っていった。

双魚宮に戻り、アフロディーテは灯りも燈さずに、一人宮の中央で思案していた。

無音の時間だけが、暗闇をゆっくりと流れていく。

ただじつと暗がりの一点を睨みつける。

自分の意思は闇に飲み込まれ、やがて自分さえそこへ溶けていってしまいそうな気がした。

ふと上から双魚宮に、降り立つ者の気配を感じる。

アフロディーテはその方向に目を向ける。あの少年が、ふらふらと上階から迷い出すように降りて現れた。

『母様』

眠そうな泣き腫らした目をこすり、少年はふらつきながら双魚宮に踏み入った。

二週間前、聖域に保護されたこの少年は、アテナの力によって一時的な眠りにつき、アテナ神殿の内宮に、安置されたはずだった。
『母様、どこ』

「……」

アフロディーテを見上げて、少年は離れたところからすすり泣く。
アフロディーテはじつと少年を冷たい目で見据えた。

少年は腕を組んで立ち塞がっているアフロディーテの様子にしばらく怯えていたが、目の前の男が母の居場所を教えてくれそうにな
いことを悟ると、泣きながら宮を通り抜けようと前に歩み出した。

アフロディーテはその少年に歩み寄り、頭を思い切り殴って失神
させ、布切れのようにその少年を拾い上げて担ぐと、つかつかと上
宮への石段が上がっていった。

そして教皇の間の前にいた門番が止めるのを振り切り、アテナ神
殿まで踏み入った。

アテナは扉を開け放って侵入したアフロディーテに、驚いて振り
返る。

アフロディーテはアテナの前に少年を投げ出し、言った。

「アテナよ。ここへ踏み入ったことと、神に手を上げた罰則ならい
くらでも受ける。だが二度と這い出さないように、重ねてこの子供
に強い眠りを与えよ」

アテナは氣を失った少年を、そつと抱き起こした。

「アフロディーテ。ありがとう、ごめんなさい。」

この子が目を覚ましてしまったなんて。今すぐにもう一度眠りに
つかせます」

アテナは少年を抱き抱えながら、アフロディーテに命じた。

「双魚宮へ戻りなさい」

アテナは静かに、アフロディーテを見上げていた。

アフロディーテは踵を返し、自宮に戻った。

神の力が呪わしかった。

アフロディーテは暗闇の中腕を組み、人間には手の届かないその

強大な力を呪わしく思った。

自分が追い求めて追い求めて、それでも一番欲した時に、手に出
来なかった叡智。

簡単に一人の清き少女の魂を、飲み込んでしまう巨大な力。

暗闇の中でアフロディーテは決意した。

アテナの聖闘士として、聖域を守ってきた一人として。

今このとき、一柱の神を手にかけることを。

アテナは少年を抱きながら、その肩を優しく撫で続けた。

アテナは自分の力が、母を求めるその子供の思いに及ばなかった
ことを知った。

今までアテナのその力を破った神はいなかった。

自分より小さく力にも劣るはずの神は、ただ母への思いにおいて
のみ、アテナの力を凌駕し、自分の力で目覚めて、安置していた内
宮の一室から、這い出してしまったのだった。

少年の手首に結い付けられたリボンに、そっと触れる。

二週間前の、星の動きの乱れはそれだった。

女神アフロディーテの召喚はまだ遂げられていない。

が、冥闘士の残党兵と冥府の巫女は、封印を解く儀式の中で、冥
府からこのリボンの片割れと少年をまず、地上に取り出してしまっ
たのだった。

怪物に襲われて息子と共にエリダヌスの川へと飛び込んだ女神ア
フロディーテは、川の流れの中離れ離れにならぬよう、このリボン
で息子と自身の身を結い付け、下流へと流されていったのだった。

そして四百年前、冥闘士の反乱と共に地上に呼び出された女神ア
フロディーテは自我を失い、死と破壊の人格を持ってアテナの前に
現れ、そしてアテナによって封印された。

以来、四百年前のアテナの施した鎖状の封印によって、女神アフロディーテは死と破壊の顔のまま、冥府へと鎖に繋がれ続けている。息子の方は行方知れずだった。

冥闘士が封印を解く中で、神話の時代より母親を求めて彷徨っていたこの息子を見つけ、地上に取り出してしまったとは、考えもしなかった。

そして瞬の体を、少年が結い付けたリボンの契約を通して、封印されし女神アフロディーテの生ける神殿にしてしまった。

神殿を破壊し続けるなら、瞬の体は持たない。

聖域は女神アフロディーテ神殿に手出しができなくなってしまった。

こうしている間にも、封印の解除と召喚の儀式は着々と、各地で進んでいる。

アテナはじっと、眠る少年の背中を撫で続けていた。

「サガ」

アフロディーテは嚴重に閉鎖された、聖域の幽閉塔の中で、自らの意志によって暗闇に身を置き続けているその人に声をかけた。

暗闇は無言だった。が、アフロディーテの意志をたしかに読み取っていた。

「あなたに願ひ出る。

あなたがアテナの力を借りて自分を取り戻し、自分の意志で今ここに居るように、

私自身も、十四年前のあの日の枷を、この手で解き放つために」
暗闇がかすかに動いた。

第十四部

しばらく経って、瞬は退院の日を迎えた。

「瞬」

出迎えたムウが、白羊宮で花束を携えて歩み出した。

「退院おめでとう。よく頑張りましたね」

花束をムウから手渡され、瞬は芳しいその香りを顔に受ける。それは薔薇ではなく、ムウが自ら選んだらしいガーベラが、慎ましかな添え花に包まれている花束だった。

「ありがとうございます、ムウ」

瞬は笑って言った。傍らにはシユラとアフロディーテが付き添い、まだ歩くのが難儀そうな瞬を支えている。

「大変なのはこれからですが、私は力を惜しみませんよ」

「…ありがとうございます」

瞬はふと微笑んだ。その表情は優しく、力無かった。シユラはムウに言った。

「アテナの元へ瞬を連れて行く。話はこちらから報告に上がる」

「いえ、一仕事終えたらこちらから出向きますよ。また降りてくるのも徒労なだけです」

一番下の宮を守るムウは、三人を穏やかな表情で見送った。

アテナは謁見の間ではなく、双魚宮で待っていた。

アテナは駆け寄り、瞬の手をとった。

「瞬」

しばらくアテナは瞬の手を握ったまま、慈しみ深い表情を浮かべ

ていた。

ふとアテナの目に涙が滲んだような気がしたのは、気のせいだったのかもしれない。

「アテナ、神殿を出てはいけません」

アテナがここにいることに、驚きながら瞬は言った。

「いいのです。今日は特別な日でしょう。あなたが戻ってきたのだから」

アテナは付き添う黄金聖闘士二人に目で示し、瞬を生活区のベッドにつかせた。

シユラとアフロディーテは寢室の戸の前で並んで待機し、アテナの警備につく。

「まだ完治はしていないのだから、無理しないで横になっていて」
瞬の額に手を当てて、アテナは優しく小宇宙を分け与える。

「アテナ。どうか私のためになど、アテナの小宇宙を使わないで下さい。使ってはいけません」

「いいの。私がこうしたいのです」

アテナの目はどこまでも、優しくかった。

入院中、見舞いに来てくれた黄金が、そつと小宇宙を使い、瞬の体の傷が癒えるのが早まるよう、何人も気を使ってくれた。瞬にはそれだけでも勿体無い思いがして、遠慮していたが、見舞いに来た黄金はそれぞれ、申し合わせもしていないのに、それを瞬に施した。それでもまだ、瞬の体は完全には癒えていなかった。

「アテナ、あの……」

瞬はずっと、気になっていたことを訊こうとして、身を起こす。

アテナがそれを制し、代わりに言葉を紡いだ。

「あなたが女神の生ける神殿となつてから、残党兵はこちらが手を出さないのを良いことに、ギリシア各地の女神アフロディーテの神殿で着実に召喚の準備を進めています」

「あ……」

「持って、あと半月でしょう。」

あと半月で召喚の儀式は完了し、女神アフロディーテは死と破壊の顔を表に、封印から解き放たれます」

「……………」

瞬は黙ってアテナを見上げた。

「アテナ、私……」

「あなたを失わせません」

アテナは凜とした声で、瞬にはっきり告げた。

「あなたが聖域にいなかったこの間、私たちはただ手を拱いていたではありません。」

あなたに約束します。

私はアテナとして、あなたの体を女神から取り戻し、女神とその子供を天界に返すことを」

瞬は息を飲んだ。アテナはしっかりと、瞬の手を握り締める。

「だから瞬。あなたは今考えていたことをけっしてしてはなりません。」

約束しなさい。今、ここに」

アテナは瞬の思いを見抜いていた。瞬は射抜くようなアテナの眼差しを見上げ、眼を震わせる。

アテナはじつと瞬の返事を待っていた。瞬は小さく、アテナに頷いた。

「……はい。約束します、アテナ……」

瞬の返事を聞くと、アテナはふっとまた優しく笑った。

「必ずですよ」

もう一度言って、アテナは瞬の額に口付けた。

そして、ゆっくり休みなさいと言い残し、立った。

部屋から出て、アテナはアフロディーテに言った。

「アフロディーテ。瞬のそばにいなさい」
そして言った。

「私は女神アフロディーテを、その息子と共に天界へ返すことをあなたに約束しましょう」

アフロディーテはただじっと、その言葉を聞いた。

アテナは自身の神殿へ戻るため、歩き出した。シユラがそのあとを、護衛しながら傳っていく。

アフロディーテはソファに座り、その背に頬杖を突いて、窓の外
の空を眺めていた。

夕暮れの空は赤く染まり、太陽が沈むために傾いている。

昼の光に代わって星星が、ひとつ、またひとつ、天に輝き始めていた。

「アフロディーテ」

いくばくかの眠りから醒めた瞬は、寝室から出てきてその姿を現した。

「寝ている」

アフロディーテは頬杖を突いたまま、扉の前の瞬に向き直って言った。

瞬はふらつきながら、それでも歩み出した。アフロディーテは立ち上がって瞬を支え、寝室に連れ戻そうとする。

「もうたくさん眠りました。そばに居たいんです」

瞬は拒否して、アフロディーテの胸に頭を埋めた。

アフロディーテはしばらくそのままで居たが、まだ歩くのも覚束ない瞬の脚が震えるのを見て、ソファに座らせた。

夕闇は次第に空を浸し始めていた。沈みかけた太陽の傍らに、宵の明星が輝き始めている。金星だ。女神ヴィーナス、アフロディー

テの象徴。

アフロディーテは瞬を胸に引き寄せ、その髪を撫でた。

瞬はアフロディーテに抱き寄せられ、その胸に自分自身をすべて預けた。

アフロディーテの鼓動を辿った瞬の掌が、心臓の上にそっと置かれる。

手首には、刻印が浮かび上がっていた。

窓から差し込む夕日の光が、徐々に弱くなっていく。宵の明星は速い速度で、沈みゆく太陽とは裏腹に、天上に上っていく。

時は満ちてしまった。

「アイオロスが死んだ日のことだ」

不意に話し始めたアフロディーテの言葉に、はっと瞬は息飲む。

アフロディーテは遠い目をした。十三年以上前の聖域に、彼の意識は飛び去る。瞬が生まれた頃、アフロディーテがまだ今の瞬より幼かった時代。

「それまで私は、聖域に来てから、ただアテナと聖域のために、正義のために身を捧げるのだと、純粹に信じていた。君のように純粹だったと思う。アイオロスとサガが聖域の将で、私もデスマスクもシュラも、兄と慕った二人に導かれて、楽しい毎日だった」

瞬は黙って聞いていた。

「聖域にはアテナはまだ降臨されていなかった。君と出会ってから、復興で君に再会するまで。何度か思ったことがある。

もし自分が聖域に来た時すでに、アテナが誕生していたら。

君がそうだったように、自分が生まれたときにはすでに、アテナがこの場所に降り立っていたなら。

自分はこうはならなかったのではないかと」

「アフロディーテ……？」

「……サガが突然行方知れずになり、偵察に行ったまま何かあったのではないかと、まだ幼かった私たちは初めて狼狽した。

デスマスクとシユラと夜通し相談して、アイオロスの元にサガの搜索を打診しに行った夜が、アイオロスの顔を見た最後だった。

アイオロスは私たちに、その任は自分のものだから、心配するなと笑っていた。

次の日シユラが教皇の命で、アイオロスを討ったとの報告を受けた。

将であつたアイオロスが、教皇を裏切ったのだと」

瞬は息を飲む。淡々と話すアフロディーテの胸から伝わる、悲しい小宇宙が伝わり瞬の胸を掻き乱した。

「兄と慕ったアイオロスに刃を向けたシユラは、その日泣いていた。彼の泣き顔を見たのは、その日が初めてだった。それから三日三晩苦悩して、シユラは自分の手首を斬った。磨羯宮で自害を図った彼をデスマスクと見つけたとき、私は改めて打ちのめされた。シユラが途切れる意識の中でずっと言っていた。どうしてこんなことに、と。私も同じ思いだった。何も言わなかったが、デスマスクも、きつと」

夕日は地平線についえようとしていた。わずかな光一条残して、訪れる夜に自分の成し遂げることを、星々に明け渡そうと最後の輝きを放っている。

「シユラの命を必死につないで、彼がようやく落ち着いたとき、私はある夜、一人教皇の間へと赴いた。命を賭したシユラに勅命を出しておきながら、シユラの事態にも何の様子も見に来ない教皇に、初めて憤りを感じたからだ。今までの教皇だったらこんなことはしなかった。私自身何が狂い始めてこうなったのかどうしても知りたかった。だが、謁見した教皇は今まで知っていた教皇とは何かが違った。私も何かあれば、シユラと同じく命を賭けるつもりでいた。

そんな私の前で、教皇は仮面の下に素顔を見せた。

それが、まるで人の変わったサガのそれだったとき、私は驚愕に戦いた……」

「……」
日はついに落ちてしまった。夜闇が完全に世界を埋め尽くした。今宵は月も出ていない。暗闇の中で灯るのは、ただ冬の星座と金星の光のみだった。

「私はサガが前教皇を暗殺し、アイオロスを逆賊に仕立て上げたと聞いて、迷わず拳を放った。あんなに激情に押し流されて人に拳を向けたのは初めてだった。

殺そうと思った。誰かに対して、あんなに殺意と悲しみを抱いたのは初めてだった。

だが殺せなかった。私は、サガには適わない、力なきただの齡九つの子供でしかなかったのだ」

「……」

瞬はふるえながら目を見開く。九歳の子供が。たった九歳の子供が。

自分が九歳のとき、私は一体何をしていただろう？

瞬は、アフロディーテが背負うものが、自分には想像もできなかった重荷と足枷だったのを知る。

想像もできない。この人は、十にも満たないその小さな身で、聖域の業を背負わされてきたのだ。

知らなかった。知らなかった、私は……この人を、何も知らなかった……。

「狂ったように笑うサガの声が、遠く意識の向こうで聞こえた気がした。

あとは、止めを刺されて自分は死ぬのだと思った。

だがサガは一瞬でも、混乱の中で正気に戻った。

そして私を泣きながら助けてしまった。私は生きながらえてしまった」

空に昇った金星は、まるで泣いているかのように煌めき瞬いてい

た。月の光さえ出ていない。ただ孤独に一つだけ大きく輝く、一等星よりも大きく輝く、ただ独りのみで、すぎる誰かは空のどこにもない。

「…それからだ。精神の安定しないサガは教皇の座に収まったが、それでも善政を敷いていた。

幼い私とシユラとデスマスクは、力で適わぬサガを討つこともできずに、それでも彼が善の精神の時には、昔と変わらず優しい心で、民に聖域に尽くす姿をここから眺めて、自分たちの無力さを呪った。力が足りない。幼い私たちの思いはそれぞれ同じだった。

初めて妥協する悔しさに涙を飲んだ。

黒きサガはときに、私たちに手を汚させる勅命を与えた。ダイダロスのこと、私にとってはその一つだ。今となっては言い訳するつもりもない。聖域を内乱状態にしないため、正しいと思って手を下したこと。

それでも世界は白きサガの善政の中、平和を保っている。

無力で弱かった私たちは、己の弱さこそが邪悪だと痛感した。だから強くなろうと決めたのだ。アイオロスが守った聖域を、アテナが戻ってくるその日まで」

「アフロディーテ…！」

瞬はさめざめと泣き出した。本当に涙を流したかったのはアフロディーテの方だったのかも知れない。彼はそれでも泣かなかった。

ただ淡々と無表情に、それでも小宇宙を伝わって、それが瞬に涙を流させる。

アフロディーテの代わりに瞬が涙を流しているのだと思った。泣くことさえ捨てて力を求めた彼の代わり、彼が失くした純粹さを持った、瞬が代わりに泣いているのだと。

しばらく瞬はアフロディーテの胸に齧り付き、嗚咽を繰り返して泣いていた。アフロディーテのシャツの胸に、瞬の涙がいくつも伝って濡らしてゆく。瞬の涙はとても熱くて、凍り付いた彼の胸にはそれが、溶かし出すこともできずに、ただ小さな痛みのように何度

も伝うばかりであった。

悲しいまでに幼かった三人の子供の戦士たち。適わない圧倒的な力の前に、純粋な思いも願いも踏みじられて、曲げられながら不器用にまっすぐ生きてきた。変わり果ててそれでも、変わらない人間の優しさを持ったまま。

アフロディーテは瞬を、そつと胸から引き離した。そして、首から母の形見である指輪の付いたプラチナのネックレスを外し、瞬の首にかけた。

「預かっていてくれ」

「アフロディーテ…？」

「君を魚座の刻印から取り戻す。私が帰ってきたら、君の手でそれを私に返してくれ」

そしてアフロディーテはひとつの名前を口にした。

「私の名前だ」

はつとして瞬は目を見張り、そして指輪に刻まれた文字を目でなぞる。

そしてアフロディーテは瞬の頬に掌を当て、そつと香気を滲ませた。

安らかな眠りが瞬を襲った。

薔薇の眠りに崩れ落ちた瞬を、アフロディーテは両手で受け止めた。

第十五部

カノンは幽閉塔から送られ続けていた、最後の小宇宙を受け取った。

積戸気を通してアフロディーテの魂を冥府に送ったデスマスクは、カノンの肩を叩いて、双児宮を去った。

「あとは頼んだぜ」

デスマスクは石段を登り、肉体を置いてある双魚宮への道を歩き出した。

「…何ですって？」

アテナは黄金聖闘士を振り返った。

「アフロディーテの魂を、冥府に落とした…？」

デスマスクの言葉を受け、アテナはわなわなと震えながら目を見開く。

デスマスクは並んで頭を垂れる他の黄金聖闘士から頭一つ持ち上げて、上目遣いにアテナに言った。

「他の者は無関係です。ただ俺とアフロディーテ本人が勝手にやったこと。」

罰則ならいくらでも受けますよ。俺は慣れています。

カノンは今双児宮で次元を操作する段階に入っていますが、あいつは不問にしてやって下さい。

あいつはただ、幽閉塔から送られてきた小宇宙を、作業的に再構築しているだけです」

怒りのように眉を吊り上げて肩を震わせているアテナに、デスマ

スクは続ける。

「アテナ。俺たちはアテナの聖闘士ですよ。

どうせアテナは自ら冥府に下り、これから女神アフロディーテの死と破壊の顔と対峙して、自分の身を傷つけ、冥府の鎖を引きちぎるおつもりだったんでしょ。

ですが、今回のような場合では、こうする方が得策です。同じ星を持つ聖闘士が黄金に居るんですから。天秤にかければ、アテナが危険に身を晒すより、黄金一人の命で事が足りるなら、それでいいじゃないですか。

しかしアテナはきつと、俺たち部下を思いやるあまり、ご自分からはこの判断を下されない。

アテナが傷つく前に、俺とアフロディーテ本人が勝手に動き出しただけのことですよ」

淡々と言つてのけるデスマスクに、アテナは唇を噛んだ。

「私は……自分の部下を、一人でも失いたくはありません……」

「じゃあ一つお願いを聞いてもらえますか。罰則の上乗せならいくらでも受けますから」

デスマスクは目線を外し、悪びれて笑った。

「他の黄金とアテナの力を貸してはもらえませんかね。

お許しいただけるなら、何とかありますよ。多分」

冥府に降りてアフロディーテの魂は、七つの夜を駆けた。

死の世界に自我を失ってなお囚われ続けている、数多の亡者の魂は、ついえることなく次から次へと襲ってきた。

それらを振り切り、ひとつずつ冥府の扉を開けては下っていく。

神話の時代にかつて女神がそうだったように、アフロディーテは冥府の扉を開けて地下へと進むたび、ひとつずつ自我を奪われてい

った。

最初の扉では頭を。

次の扉では耳を。

次の扉では腕を、脚を。

最後の扉では、体を。

冥府の最下層に降り立った時、アフロディーテはすべてをもがれ、もはや形なき魂となった。

言葉もない。光もない。声もない。色もない。

無限に広がる、無。この世界と一体となってしまうようになる。

ただ最後の魂のみの輝きで、アフロディーテを個として死の世界と隔てていたのは、たった一つの信念が生き続けていたがゆえだった。

魂はあちこち裂け、延々と流れ出る小宇宙は止まることを知らない。

カノンは、幽閉塔から受け取った小宇宙の再構築を続けていた。その小宇宙の波動は、無数の方程式となって、冥府と十三年前の地上を結ぶ。

アテナの内宮で再び眠りについていた少年は、次元のはざまへと姿を消した。

アフロディーテの魂は、闇の中に一柱光を放って輝く、封印された女神の元まで舞い降りた。

封印されし鎖に繋がれた巨大な女神は、死の世界の中で、氷の中

の炎のように重く揺らめいていた。

魂の揺らぎだけになったアフロディーテの意思是、女神の前に立ち、離散して流れ出ていた自身の小宇宙を収束させ、個の状態を必死に取り戻す。

『…女神アフロディーテ』

アフロディーテの魂は黄金の小宇宙となって輝き、拳を眠れる女神に向けた。

『今こそ、その頸木からその魂、解き放ってくれようぞ』

アフロディーテが拳を放った時、無数に放った拳はすべて、女神の前に現れた小さな小宇宙に吸収された。

『母様を、傷つけないで』

女神の子供が、母親の前に立って、アフロディーテの拳をすべて飲み込む。

異次元ではそれに同期するように、十四年前の聖域で起こった出来事が、再構築されてゆく。

「…サガ…」

仮面の下顔を目にした少年アフロディーテは、恐怖と衝撃で身を染め抜かれて震え出した。

『母様を……傷つける者は』

少年の目が見開かれ、体から巨大な小宇宙が立ち上る。

「どうして……あなたが」

少年アフロディーテは、恐怖と衝撃に打ち震えながら、無意識に拳を構える。

『殺す』

少年は泣き叫び、激情に押し流されて小宇宙を爆発させた。爆風に飲み込まれ、全身に衝撃を受けて、アフロディーテの魂は

死の大地に打ち付けられた。

少年アフロディーテは目の前に教皇として現れたサガが、いとも容易く自分の拳を握り潰したのに目を見開く。

暴走した少年の小宇宙が何度も体を貫く中で、アフロディーテの魂は、全身を裂かれながら、命を賭してその少年に飛び掛った。

サガの手が、少年アフロディーテの顔にかかる。

目の前に現れて顔に手がかかる瞬間、恐怖に染め抜かれた顔で、少年はその戦士を見上げる。

封印された女神が爆発するように輝き、鎖が打ち砕かれて巨大な光となった。

女神は鎖から解放され、息子を守ろうとした母としての思いが、封印されていた死と破壊の形相を塗り替えて現れる。

祈るアテナに付き従っていたシヤカは、今ですと告げた。

アテナは母としての顔を一瞬でも取り戻した女神のいる次元に、祈りの手を伸ばした。

カノンが再構築していた方程式は、更にさまざまな地上の過去と同期して、因果は相似の解として、次元同士が向かい合う。

「母様、怖い、母様」

幼いアフロディーテは泣いていた。

その小さな体をしっかりと抱きしめ、母がアフロディーテの背中を優しく摩り、頭を撫でる。

「大丈夫……大丈夫よ」

母は優しく、息子を慰めた。

「愛しい私の子。誰にもあなたをもう奪わせないわ」

母は泣きじゃくる息子に、付けていたプラチナのネックレスと嵌めていた銀の指輪を外し、それを通して結び合い、息子の首にかけた。

巨大な封印の鎖が冥府に崩れ落ちる。

死と破壊の形相で繋がれていた女神は、母としての顔を取り戻し、光となった。

母の光は息子を守るため、光線のように戦士の魂を貫く。

そのとき、少年を手にかけて戦士を、次元の狭間から放たれた清い小宇宙が包み込んだ。

『
』

戦士の魂は、身を包んだ光が名前を呼ぶのを聞いた。かつて母が、幼い頃呼んでくれた自分の名前を。

あの少女がどこかで、今、私をその名で呼んでいる。

時間が存在し得ないいくつもの異次元の中で、

干渉を受けて相似形に向かい合った二つの出来事はこの瞬間、過去と未来を動かした。

少年は恐怖に顔を歪めてその場に崩れ落ちた。

サガの巨大な力が、少年アフロディーテを砕き倒す。

少年アフロディーテは、この人の手で殺されるのだと思った。

狂ったサガの眼光が一瞬揺らぎ、善と悪の人格のはざままで突然苦しみ出す。

その隙をとらえて、光の中から戦士は、女神めがけて最後の拳を解き放った。

女神の巨大な光体は一条の拳に貫かれ、世界とともに崩壊する。星々が消滅し誕生するような巨大なエネルギーがぶつかり合い、宇宙は離散しては集合する。

女神と戦士は巨大なエネルギーの中、拮抗しながら溶け合い、次元はその力すべてを飲み込んだ。

カノンが最後の、小宇宙の計算式をすべて解き放ち、双児宮から死の世界に拳で放って干渉させる。

封印から解き放たれた女神と二人の空間を、無数の関数の因果が切り取って、次元移動が始まる。

巨大なエネルギーは上昇しながら次元をいくつも飛び越え、星の水柱のようにほとばしり、世界を貫いた。

恐怖に染め上げられた少年は、翳された手が、そっと自分の顔に触れるのに気付く。

戦士は穏やかな目をして、少年の頬に手を当てた。

戦士は少年を抱き起こした。

激情に押し流されて全小宇宙を放ち、全身から力の抜け切っている少年は戦士に抱かれ、座り込んで泣いている、一人の女神の手に委ねられた。

女神はぼろぼろと涙で頬を濡らしながら、息子を引き渡した戦士を見上げる。

「もう、二度と離すな」

戦士は女神に言った。

「冥府に繋がれた死と破壊の顔は、再びあるべき顔に統合されて消滅した。」

これからは、神話の表に謳われる通り、天界で愛と豊穡の女神として、輝き続けるがいい」

戦士が最後の言葉を告げ切ると、その体に幾筋もの光の亀裂が走り、魂は原子の次元で爆発した。

女神とその息子は涙を流して、砕け散った原子が次元のはざままで、薔薇の花びらのような小宇宙となって、目の前で舞い散るのを見ていた。

母の人格を取り戻した女神は、舞い散った花びらをかき集めた。

死と破壊の人格は消え失せ、愛と豊穡を司っていたはずの自分の力はどんな形だったのか、花びらをかき集めながら、女神は記憶を探った。

シヤカはアテナに、眼を閉じたまま言った。

「カノンの最後の拳が、現世の地上と異次元の空間をつなぎ合わせました。

これより、女神とその息子を天界に送り届けます」

「待つて」

アテナはそれを制した。

アテナの祈りの前に、異次元から舞い降りた、女神とその息子が

姿を現した。

異次元から女神は、アテナの耳に告げた。

アテナはそつと、やさしく微笑んだ。

「……わかりました。ですが今回は、願いはその一つだけです。私は前からあなたともつとお話したいと思っておりました。

あなたがもともと、深く平和を愛する神であることも知っています。

私たちはこれから更に、良い関係を築くことができるでしょう。

これからたくさんお話して下さいな。

貴方が知らないことを私がお聞かせできるように、

私が知らないことを、貴方が聞かせて下さるこれからを、楽しみにしています」

アテナが女神の要求と、願いを受け入れると、女神の光体は嬉しそうに涙を流しながら微笑んで、そつと自分と息子に結び付けていた紐を解いた。

神話の時代より別たれていた親子は、今こそ再会を果たした。

シャカはそれを見て、拳を放った。

女神とその息子は寄り添って抱き締めあった。息子は、母様、母様と泣きじゃくりながら、母の体を、いやというほど抱きしめ続けた。母は親としての愛をもって、その息子の声に応えるかのように、固く固く抱きしめ返した。

アテナはゆっくりと天へと立ち戻ってゆく、その親子の姿をずっと、見守った。

母と子が天界にたしかに送り返されたとき、空から、紐の結び目を表していたアルレシャの星が消え、宇宙では二匹の魚を象っている星星が、形を変えて寄り添い始めていた。

もう紐で互いを縛る必要もない。

命と引き換えに十四年前の巨大な因果を乗り越えた戦士の手によって、再会を果たした親子は、もう二度と離れることはなくなったのだから。

第十六部

唇を這う熱い力を感じて、アフロディーテは意識を取り戻した。体は割れたように重く、動かそうとしても動かない。

自分の上を這う、女の熱い体があった。

女はもう一度、アフロディーテに口付ける。

かき集めた魂の破片は愛と豊穡の神の中で再び溶け合い、新たな息吹を宿して、口移しで肉体に返っていく。

女神はその耳元に、何か囁いて、光の中に溶けていった。

「…アフロディーテ…？」

瞬は、双魚宮の中央で、手を付いて人魚のように座り込んでいるその人に気付いた。

「アフロディーテ！」

瞬は駆け寄り、その肩を激しく揺さぶった。

アフロディーテの顔は熱を帯びて、目は潤んで揺れ動いていた。

瞬が揺さぶるとアフロディーテの体から小宇宙が舞い散り、それらは床に落ちるまでに、無数の薔薇の花びらになった。

アフロディーテは狂おしそうに瞬の首に手を回し、その小さな胸に自分の顔を預け、薔薇の花びらを吐き出す。

「瞬……」

熱を帯びた声で、アフロディーテは瞬の名前を呼んだ。

「体が……とても熱いんだ」

荒い息遣いで、アフロディーテはとめどなく薔薇を吐き続けた。瞬は苦しそうに上下しているその人の肩を、頭を抱き竦めた。

「大丈夫……大丈夫……」

瞬は落ち着かせるように言って、その人の頭を掻き抱く。

口伝に女神の力を分け与えられた肉体は、長い間激しく苦しんでいた。

どのくらい経っただろう、やがて少しだけ呼吸が浅くなると、アフロディーテは濡れた瞳で瞬を見詰め、その顔を熱い両手で包み込んだ。

瞬の顔に、甘い吐息がかかる。強い薔薇の香りがした。

アフロディーテは求めるように、瞬の唇に自分の唇を何度も重ね合わせた。

一連の友人の行いに対する罰則を軽くして欲しい、と打診したシユラを、アテナは優しい目で振り返った。

「そうですね。長く休暇でも与えましょうか」

シユラは驚いたようにアテナを見上げた。

「無断で冥府に下った罰。私が行うはずだった冥府の封印の解除を行った罰。」

ですが、冥府にとらわれていた死と破壊の女神の人格は彼によって破壊され、

神話の時代より別たれていた女神とその息子は、天界に戻っていききました。

罰を与えるとしたら、彼は既に受けています。

恋を囁く愛と美の女神が、これから先に訪れるはずだった狂おしい胸の痛みを、

少しだけ早く彼に授けてしまいましたから」

デスマスクは青い空を見上げながら、天に目掛け草笛を吹いていた。

「魂は冥府に落としたが、肉体は双魚宮に置いてきたからねえ。

しかしまさかそれを、天に帰る女神が寝取るとは思わなかった」
腹を抱えながらデスマスクは笑い出した。

こんなに楽しいことはねえ。

今まであいつに泣かされたどの女も、これで溜飲が下がるだろう。
どんな女も夢中にさせるだけさせておいて、いつも本気にならなかった弟分が、あんなガキにうつつを抜かす羽目になるなんて。

「女神様も面白いことしてくれるもんだぜ」

最高だ、とデスマスクは大笑いした。

青い空はどこまでもどこまでも、晴れ渡っていた。

最終章

瞬は焼いたケーキをベランダのテーブルに並べ、祝いの準備を整えていた。

ベランダに立って夕日を眺めていたアフロディーテは、その少女の背中を取り、後ろから抱きしめた。

「アフロディーテ……みんなが来る前に、用意しないと」

「しなくていい。そんなこと」

そして瞬の首筋に、鼻と唇を這わせた。

瞬はあの日からずっと、急にスキンシップの多くなったこの人に困り果てていた。

月は三月。日は十日。

女神の力を肉体に受けたアフロディーテは数日間苦しんだが、体を駆け巡るその巨大な力を、少しずつ制御できるようになり始めていた。

始めの頃はとんだ騒ぎとして、この力は聖域を駆け巡った。

熱を帯びたようなふらつく体で薔薇を吐き続けながら、宮をひとつ降りるたびに、アフロディーテは仲間の黄金聖闘士たちを見つけると無意識に小宇宙を暴走させ、その力はときに、黄金聖闘士全員がまとめてかかっても、抑え切れないほど強大だった。

毎日本人や誰かしらが負傷していた始めの頃に比べたら、瞬だけがやたらとスキンシップを浴びせられることくらい、本当に可愛いものだと思えるのは笑いながら言った。

「……アフロディーテ、ちょっと、くすぐりたいからやめて」

瞬がいくら言っても、アフロディーテはその攻める手を、緩めようとしなない。

アフロディーテは瞬を抱きしめながら、瞬の首に預けてあるネッ

クレスの指輪に触れた。

「あの……これ……」

あの日から、アフロディーテに返そうと思ったこれは、付けていると言われ、今も瞬の胸にある。

アフロディーテは瞬を抱きしめながら、静かな声で言った。

「……子供にとって、母親はすべてだ。」

やがて大人になると子供は母親の手から離れて、一人の女を自分のすべてにする」

アフロディーテは瞬の唇にそっと口づけをした。

「三年待つ」

アフロディーテは瞬の目を見詰めていった。

「ずっとここに居ろ。けして離さない。三年経ったら、私の妻になるんだ」

妻、と言われて瞬はびっくりと仰天した。幼い瞬にはまだ、そんな言葉は早すぎる。

だがアフロディーテは、狂おしいこの思いを手放す気は毛頭なかった。

夕闇が降り、空には再び、宵の明星が天に昇り始めていた。

赤い顔で俯きながら、瞬はさつきまで読み返していた、ギリシア神話の双魚伝説を思い出す。

恋を囁きかける愛と美の女神。

黄金の矢で心を射抜き、人に恋をさせるその息子。

瞬がふと天を見上げると、親子の神々が瞬くように、金星が輝いていた。

瞬の手に結われていた魚座の刻印は、アルレシャの星の消滅と共に消えた。

が、代わりに女神の力を受けた魚座の戦士は、数年後に訪れるはずだった運命の刻印を、瞬の首に新たに彫り付けてしまった。

アフロディーテはもう一度、だが深く何度も瞬の唇に自分の唇を重ねた。

舌を絡め合あわせ、瞬に息をする間も与えないほど何度も何度も、アフロディーテは唇を奪った。

祝いの贈り物を携えて、友人たちが双魚宮を訪れる足音がした。それでもアフロディーテはずっと、見守るように輝く金星の下で、瞬を抱きしめ続けていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6315s/>

双魚伝承

2011年4月21日21時10分発行